東方二次創作カニバリズム（食人・食妖）本

R-18Gな幻想郷のごはん合同誌

企画 magifuro蒟蒻
主催 蒟蒻鍋

参加人数34名、
全33作品掲載！

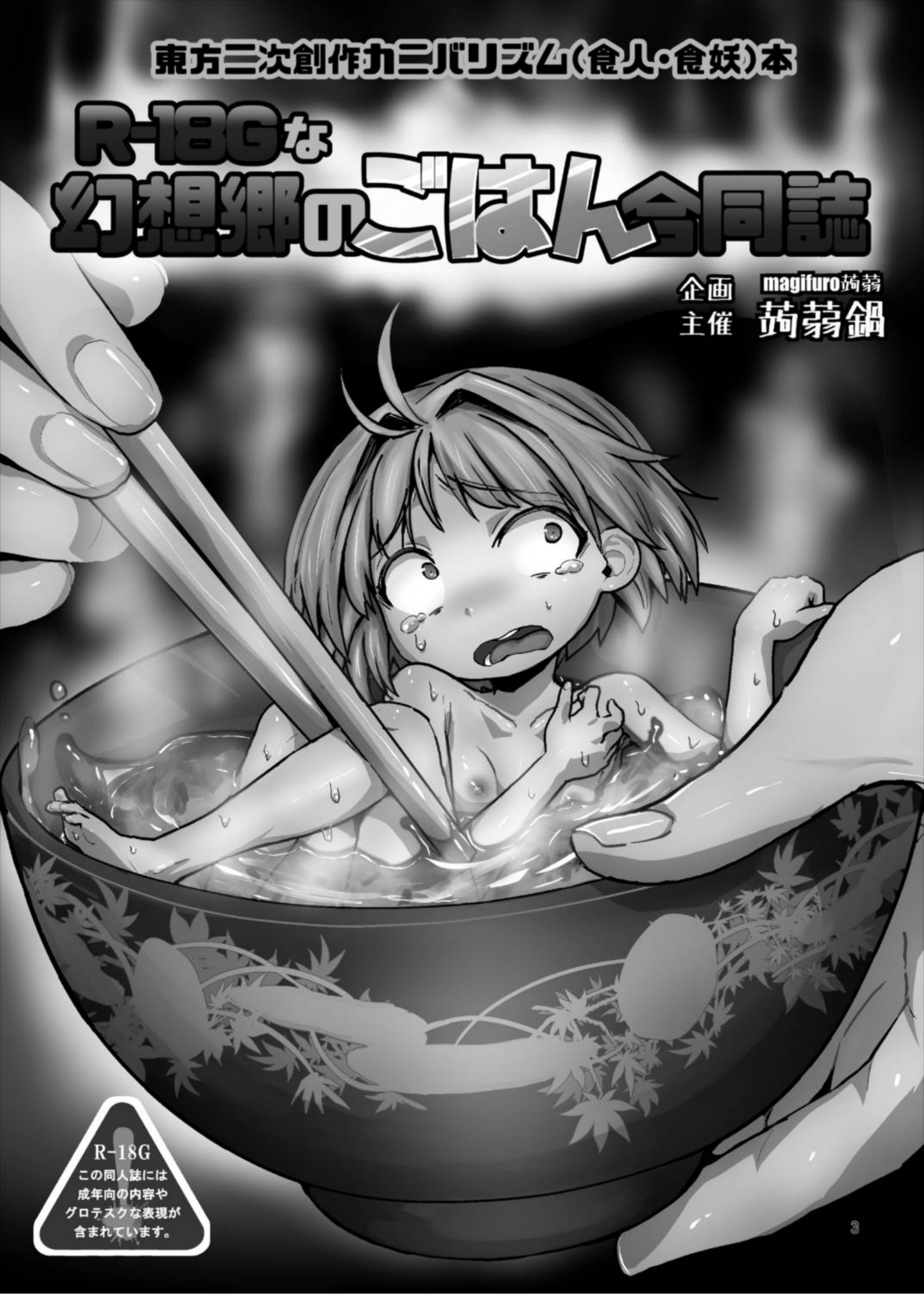
R-18G
この同人誌には
成年向の内容や
グロテスクな表現が
含まれています。

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

東方二次創作カニバリズム（食人・食妖）本

R-18Gな幻想郷のごはん合同誌

企画 magifuro蒟蒻
主催 蒟蒻鍋



R-18G
この同人誌には
成年向の内容や
グロテスクな表現が
含まれています。

もくじ

magifuro蒟蒻 ……05
ゼムリカ ……09
おちこち ……13
ヤルク ……15
またさぶ ……19
あおじそ ……20
原崎 ……21
nnnn ……24
バッタ ……26
くろぅす ……27
ヒヤシン酢 ……29
金鯱 ……33
たなか ……37
いろどり ……45
唐沢栗史(カラクリ) ……49
ニトロ基 ……53
55……　みしま
61……　フーポ
65……　まちのだがしや
69……　はちべー
71……　山嵜誠那
73……　ゆきすけ
77……　緋泉ヒロ
81……　Kamiya
83……　影朗
87……　狭霧ぶろん
91……　詩季
93……　三毛真黒
97……　あどにす
99……　レキシタイふのじ
105……　細井コウゾウ・samin
117……　あんどおひふみ
125……　エンジェルダスト

※注意事項※

・当合同誌は『東方Project』と『カニバリズム』を題材にした二次創作合同誌です。
・本来カニバリズムは主に人間同士の共食いを指す語ですが、幻想郷では一部を除き妖怪も人型ですので細かいことは抜きにして登場人物を食材扱いする描写があれば表現手法・作風・残虐描写の有無を問わず上記のテーマに沿うものとしています。
・なんでもあり。うまみあり。 こがりょなシリーズもよろしく!
・上記の理由により一部に性的及び猟奇的な表現が含まれます。ご了承ください。

『(R-18Gな)世界一可愛い味噌汁の具』
magifuro蒟蒻

フゥ〜〜〜ッ♡♡
ほっこり
寒い日はやっぱり湯浴みに限るねー
なんか既視感がある光景……

今のアンタまるで汁物の具材ね
ビクッ
見てたらお腹空いてきたわ
え……じょ、冗談はやめてよ！
私なんか食べても美味しくないって
そんなことはありません！
どんな食材も調理法次第で美味しく頂けます！
……誰？
アンタは東風谷早苗！
いつの間に…
ドヨ〜〜〜

※イメージ図

まず解体する段階ですが
この時決して内臓を傷つけないよう
注意してください

消化液や糞尿が付くと
肉に臭みが出てしまいます

内臓自体は洗浄して使うので
捨てないでくださいね☆

うぉイッ!?
なんだこの
イメージ図は!!

ギゃーッ

話聞けーッ!!!

手早く解体できるなら血抜きは不要ですが
腐食を防ぐため
お肉は予め流水で冷やしておきましょう

血抜きをしないと
血生臭いんじゃないの?

血生臭さは血液自体ではなく
血液の腐敗(細菌)が原因なので
悪くなる前に使ってしまえば
一切問題ありません!

へぇ〜

新鮮な血液は風味も良く
栄養価も高いので
可食部の少ない小人の場合
抜かないほうが
望ましいですね

捨てる部位は
少なければ少ないほど
良いのです

なるほどねぇ
勉強になるわ〜

メモ
メモ

あの…

トントン

可食部位を余さず使うため
骨の硬い頭や手首足首を切除した後
全身を包丁でたたきミンチにします。

小動物(?)なので
骨ごと切るのも
難しくないでしょう

充分に細かくなったら
同様に刻んでおいた
内臓と生姜とネギ……

それにお塩少々と
片栗粉を混ぜます

サラ…

お好みで
胡麻などを
入れるのも
良いですね

……

後は予めお出汁を取っておいたお鍋に

ちゃぽっ

スプーンで掬った生地を放り込み……

具材を足してお味噌を溶かせば…

くるくる

完成！うまみたっぷりの『つみれ汁』です！

～小人つみれ入り味噌汁～

☆☆小人のつみれの材料☆☆
小人 ……1体分
塩 ……少々
片栗粉 ……適量
生姜 ……お好みで
刻みネギ ……適量

☆☆味噌汁の材料☆☆
小人のつみれ……上記分量
長ネギ ……適量
豆腐 ……1/2丁
昆布出汁 ……小鍋一杯
味噌 ……大さじ3
山椒 ……お好みで

お椀 ……小人の所持物

お肉の味が汁に溶け込んでこれだけでご飯が進みますよ！

なるほど…味噌の味とは合いそうね…！

合わないよ！合っても食うなー！

わ、わかってるわよ……冗談…冗談だって……

なーんだよかった……

あれ？作らないんです？他の材料も用意してたのに

……おい

ほっ…

コトコト…

せっかくだから普通の味噌汁を作るわよ

あっ霊夢さんシメる時は窒息させるのがオススメですよ☆

おいしくなります

だからやらないって…

ふー さっぱりした

よっこいしょ

いやでも……どんな味かは気になるのよねぇ

ひぇひぇ

……縄かなにか使えばいいの？

ひぇ…

おっ良いですね～キュッとイキましょう！キュッと！

ひとおもいに！

ピキン…

ちょっ…声が大きい！聞かれるでしょ！

ひぇひぇ

……って既に居ない!!

OH…早苗ミステイク☆

てへぺろ

こっぜん

おとなしく出てきなさーい

さっきのは冗談だって…

ちゃぶ台の下

針妙丸――ッ!!

もぐ～ 霊夢さんったらヨダレでてますよ

……輝針城に帰ろう……は、!?

◇幻想郷のごはん合同誌、始まるよ!!!

あら？こいし帰ってたの？

めずらしいわねあなたが料理なんて

何を作っているのかしら？

こいしちゃんがごはんつくるはなし

ぜんりカ

おねえちゃん！たまねぎをすりおろしてるの！

……。それは見ればわかるわ出来上がりはなんなのかしら

……。タレ

ゲジャ ゲジャ

？

たれ？

うん 漬けるやつ

あぁ！漬けダレねなにを漬けるのかしら？

ガタン

ゴト

それ

え、なにこれは…すごい暴れてるじゃないいきもの？中になにはいってるの…

ガタ

地底のねー。入口のとこ！なんか桶に入ってる子がいたからなんとなく誘拐きちゃったー❤

おじゅゆ

ちゃぽ

いろいろ考えたけどせっかく桶に入ってるしそのまま漬け込んじゃおっかなってこの桶が棺桶になるならこの子もきっと本望だよね❤

なんとなくで誘拐してきてあまつさえ食べてしまおうというあなたの発想にはお姉ちゃん驚嘆を隠せないわ…

まぁ、地底のほかの連中には隠しておくから自由にやりなさい

ぐぢゅ

ぐじゅ

お姉ちゃんだいすき！明日まで漬け込んで夜ご飯にするからね！みんなで食べようね！

えぇ

たのしみにしてるわ

たっぷりと
すりおろした
たまねぎと
りんごと
お酒とお醤油
みりんと砂糖
にんにくをちょっと
いれて❤
ボボ
ボボ
ゴポポポ
えっ
えっ
えっ
えっ
たすけて
バチャ
バチャ
バチャ
ゴポ
ゴポ
え…
ほんとに…
本当に…！
わたしのこと…
食べるつもりなの!?
い…いやっ…！だれか…！
ちゃぽん
わく
わく
わく
わく
しっかり中まで
染み込んでね❤
みんな喜んでくれる
かなぁ❤

うっひゃー！ごちそうだ！さとりさま！ごちそうです！おくうお肉だいすき！

中には野菜や香草をつめて香りをよくするとともに肉汁を閉じ込めたんだよ♥

野菜スティックやパンお肉をつけて食べるのおねえちゃんは脳が一番好きなんだよ♥

HAPPY END♡

今日は咲夜が休みで居ないから自分でご飯を用意するわよ！

ハーイ！

プチ

プチ

騒がしい食材ね

描いたひと:おちこち

ダァン

!!!

サクッ

ビィ〜〜〜

魔法の森にあふれる
魔力の中で育った
人間の血と肉……

いったいどんな味が
するのかしら

ぱくっ

何の変哲も無い
普通の肉ね

にちー

もぐ

……ふむ

もぐ

end

• 清燉小傘腦スープ
ヤルク
色が薄めのスープ
脳見えない
刻みネギ
小傘脳（約1/3量）
おおっ これは噂の―
小傘脳料理ですか！
すごい、プリンみたいぷるんぷるんしている！
モグッ
……うまい！
生臭さを消し去っていて、口感も柔らかく、綿のように口の中で溶けてしまいます……！
気に入ってくれてうれしいです！
来月の新メニューなんですけど、やっぱり文さんの好評を聞かなきゃら安心できませんね

…しかし、流石に料理より驚いたんですね

目の前のウェイトレス養殖小傘ちゃんなんで平然として立ってるの？

しーん

いま食っているのはこいつの脳みそですよね…？

わかる！すごいでしょう～？

小傘牧場

ナニニシマスカ？

むにゅ

ド

これは我が小傘牧場が開発中の最新鋭サービスですよ！

遺伝子操作を行なうことによって、我が牧場が養殖小傘の潜在力を掘り起こした

いまの養殖小傘はまさに豚を超えた甚大な経済価値を持ってる畜産になりましたが、私はそれ以上の可能性もあると考えています

MILK

サービス業に投入できるまで知能を高めたら？

だがそうすると脱走事案は飛躍的に増えるので逆に管理が難しくなります

そのため、私は永遠亭のえーりん先生に相談しに行きました

簡単でしょう？家畜なら話を聞ければ大脳いらなくもいいわよ

あらあら

師匠、それは流石に…

バン

先生天才かよ！

ええ…

解決策がすぐに見つけました

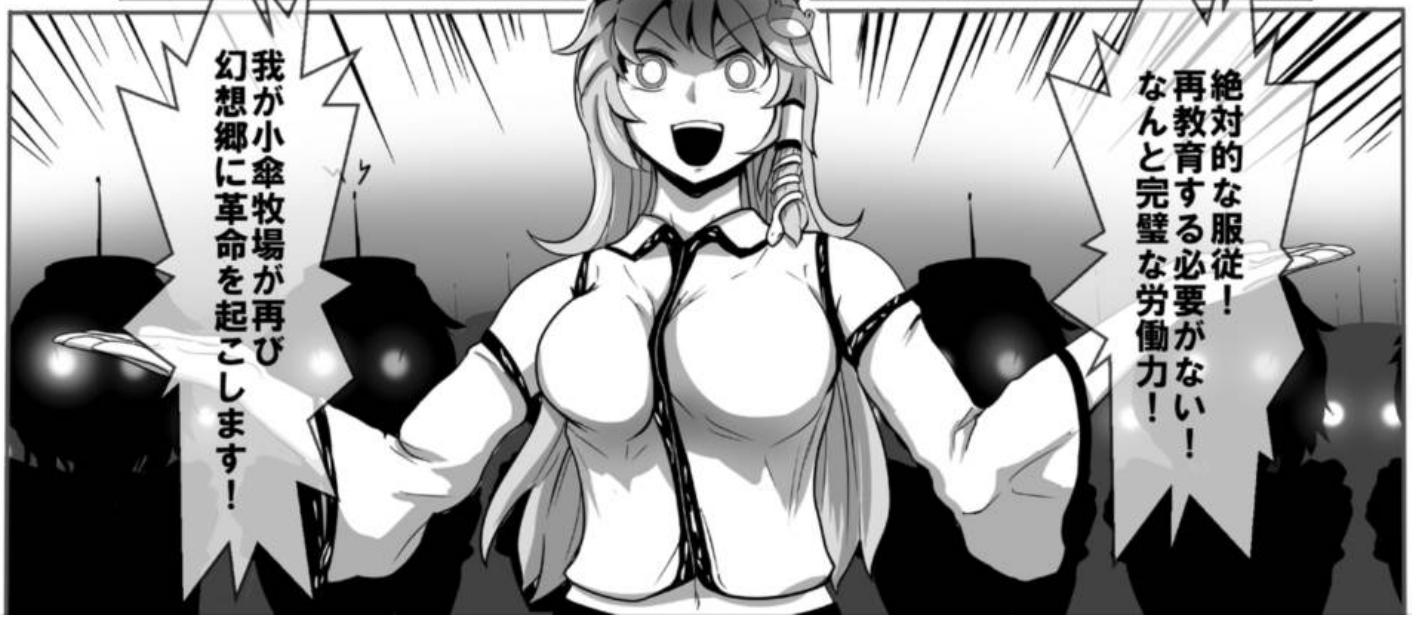
さすがにエイリアンです発想はスゴイ

この子使って実験すればどうでしょう？

あら、おっぱいは大きいしスタイルもいいね、キレそう

ではこの子で試してみましょう！

?



す、すごいです！
専門の話はよくわからないけど…
じりじり

おや、もう時間なんですね
じり
00:00

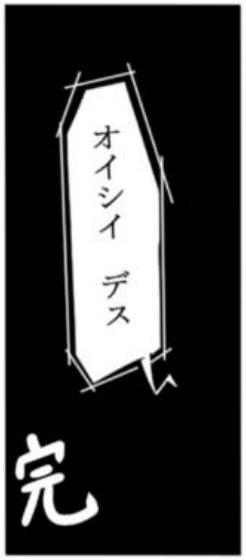
間もなくえーりん先生のロボトミー手術が始まります！見学しに行きましょうか？
ハシ
本当ですか！ゆっくりデザート食う時間じゃないじゃん！ぜひよろしくおねがいします！
ではこちらへどぞ～

あんた、どうせそろそろご飯時間だからこれ代わりに食い尽くしなさい！
カラ

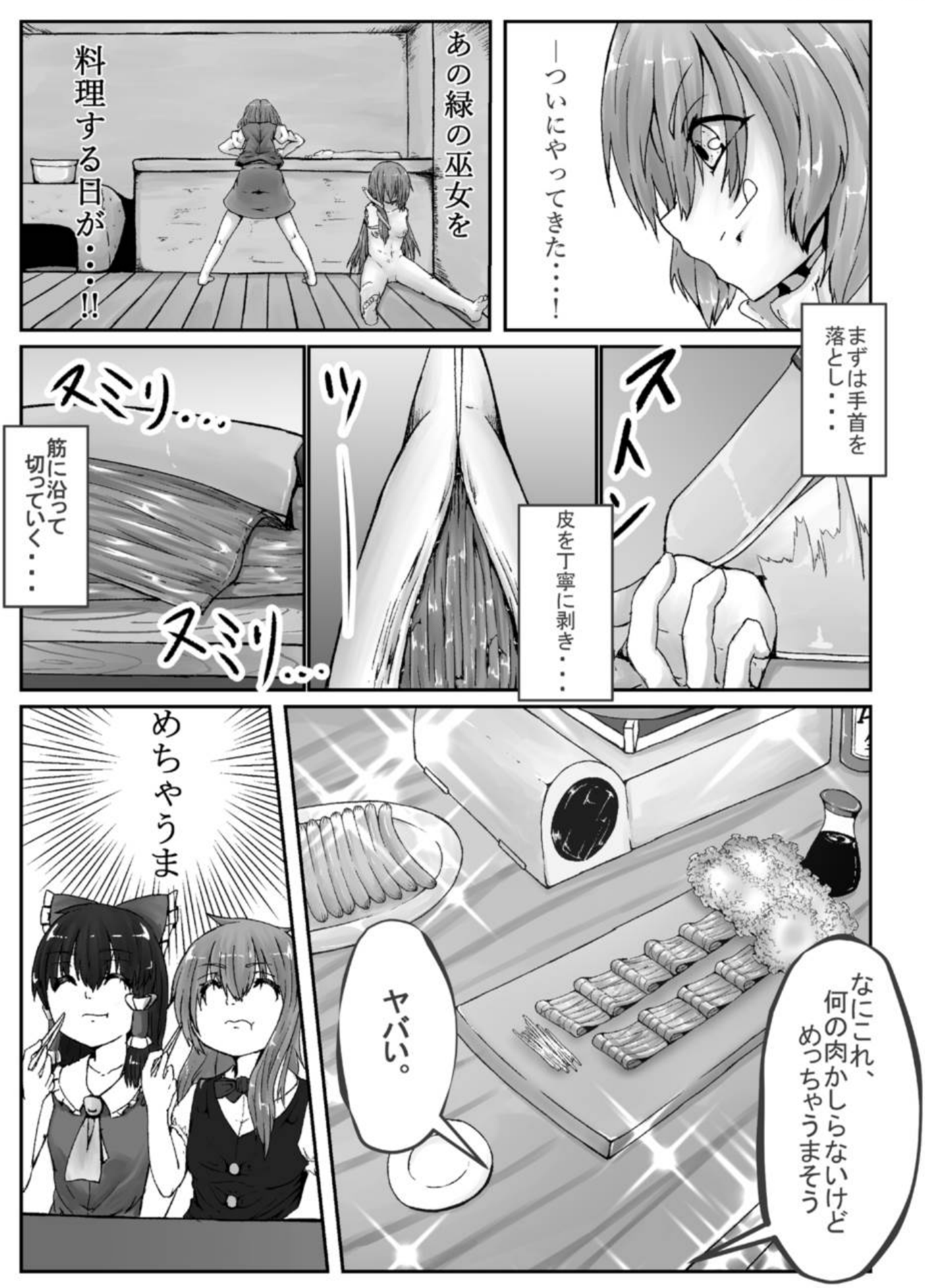
絶対いいキタになるわ！
ス…

…

ハムッ


オイシイ デス
完

Penis are Tasty!!
またさぶ


—ついにやってきた・・・！
あの緑の巫女を
料理する日が・・・!!
まずは手首を落とし・・・
スイン
皮を丁寧に剥き・・・
ツー
スミリ・・・
筋に沿って切っていく・・・
スミリ・・・
なにこれ、何の肉かしらないけどめっちゃうまそう
ヤバい。
めちゃうま

かいたんは原崎
今日は鶏の丸焼きを作ってみましょう❤
まずは血抜きをします
しっかり血を抜かないと味が悪くなるので気をつけましょうね❤
せんせーこの子首が切れても息しようとしてるー
なんだか苦しそう…
大丈夫よ
頸動脈っていう太い血管を切れば血が一気に出て意識がなくなるの
苦しくないから心配しないでね❤

十分に血が抜けたら
次は内臓の処理です
ぷぴ…
ポタ
ポタ

臓器を傷つけないよう
ゆっくりお腹を切ります
ぷぴぴ
ブッ
ブッ

そして
思いっきり…
ぐちゃ
ブチ
ブチ
ぐい
ズリリ
引っ張る！

内臓は傷みやすいので
早めに処理しましょう❤
キレイに洗って
部位毎に分けてください
ぷる
ぐちゃっ
はーい！

体もキレイに洗ったらおなかに野菜やお米を詰めて…

ワィ

ワィ

まだはいるよー

おなかすいたー

じっくり2時間ほど焼きましょう

完成ー！

できたてのおいしいうちに食べましょう❤

じゅわ

ん

いっただっきまーす!!

おわり！

nnnn
ごめんねぇ おじさん食人陵辱 しないと生きられ ない性なのね
しかしイキナリ 不死身ちゃんとは もう性活に困らなくて 済む来てよかったね 幻想郷！
そっちのはただの 兎だべ後で鍋にでも すっぺ
あ～ごっつええ 具合やでのう 勿体無えくれぇだ
尻食う前に 掘っとくかえ
こっちのは 蘇るで関係ねぇで。
気分の問題じゃろ 流石のキツキツじゃ～ 妹紅ちゃん最高か
今日は何回 イってもええでなあ おらイクぞ

射精る…
うっ
ひゃるるッ
ゴポッ
ゴポッ
どくどく
ビュー
ビュー
ゴポッ
ゴポッ
ゴポッ
もこたんも
イクかな？
感じてきた？
逝くの間違い
なんだよなぁ
ん、あれ？もこたん
は？まあそんな
遠くにリスポン
はないでしょうし
せやな
というかそれより
なんか暑くねが？
つか腹減ったぞ。
今食ったとこ
なのにな？

CANNIBALISM GŌDŌ

By Batta

この場所…
女性の失踪事件が多くなったと訊いたけど…
パッ
パチッ
惨い…アイツら人を…妖怪までも食べてる…
ぐじゅ
ぐちゃ
グッグッズチュ
幻想郷にこんなのがいたなんて
こんなの見過ごせないっ私達で異変を解決しないと
オンナだ…
!!
ニグッ!!
グクッ
新鮮な肉だッ!!
もちろんですヤツらを倒しましょう
来ます鈴仙さん!!
はいッ
ドバッ

しかし、彼女達はあっけなく敗北した…
男達にまぐわされ凌辱の限りを尽くされた後に
痛みを快楽にする媚薬を飲まされ徐々に屠殺された

四肢を切り落とされ…腹を裂かれ…
臓物を抉られ…肉を貪られる…

もはや彼女達に判断は出来ず、激痛と絶頂を繰り返し
糞尿を垂れ流しながら絶命するのであった
人間の尊厳はなく、家畜としての快楽を満たし…

数日後、人間の里のはずれに
変わり果てた彼女達の遺体が発見された
脳や眼球を抉られた頭部と肉塊の一部が
串刺しにされた状態で…

この禍々しき光景には
『お前等はいつでも皆殺し出来るのだ
許したければ服従だ、若い女をよこせ』
奴らのメッセージが籠められてた…

はぁー眠くなってきた

さてー

面倒クサくないうちにでも仕込みするかしら

ふふっ

あったあった

よし…

ガサ ガサ

明日は寅のモツ煮込にしましょ

さっさと終わらせるから動かないでよね

待っー

スーッ

そうそう我慢してればすぐにー
うぅ
あー吐いちゃってまぁ…騒がれるよりはマシね
おえっ
げえっ
あともうちょっと…というか意外とつっかかる…
ヌチ
ぐいっ
ん？これかしら
とうっ！
あああああ
ハァ
ハァ
なるほど大腸(シマチョウ)だったかもっと下を切っとくべきだったわ
デローン
そういえば…

生ホルモンってどんな味がするのかしー
マズッ！？臭み強ッ！こんなの食えるか！
ホントモツ煮にする気失せたわ！あー不味
?
今日のところは『戻す』けどいいかしら？
…まさかやめっ…
まぁ嫌でも戻すけどー
ねっ！

オ゛ぉぉぉぉぉぉぉぉ
…
やっぱ明日は普通に鍋ね
魔理沙でも呼ぼうかしらー
次の日星の両手足は切り落とされ無事鍋の具材となった
共に(何の肉か知らずに)食べた魔理沙からは好評だったという
終

あの…
ギイイ…
いらっしゃい
よく来てくれたわ

ねえリグル…私と
ずっと一緒にいたいって
言ったわよね
そう…それで
考えたの
あっ…！
あの言葉のお返しが
したいわ
受けて
くれるわね？
も もちろんです
幽香さん…！

あ…私
やっと
どき
どき
どき
幽香さんと…
こんな…
ちゅ…

ブチブチブチブチ
ブチィ
ひゃ…
ん…
おいし
気に入ったわ
リグル
ぼた
ぼた
ぼた
ふぇ
ぼた
ぼた

痛い…
でも
なんで…
かな
幸せ…
グチュ
グチュ
…どうかしら
あなたと
一つになっていく…
ほら…ずっと一緒よ？
あ
あひ
ありが…う…
ご…ひゃ…
聞こえないわ
ブチュ
ブチュ

このまま全部…
いいわよね
私に頂戴
はーー
はは
ひゃ
はいっ
お願いします！
ず
ずっと
ずっと
私を——

ふふ…
はぁ…ふふふ
あなたの身体…きっといい養分になるわよ
リグル…愉しかったわ
きっと…綺麗な花が咲くわね
……実質私と幽香さんの子になるよね
ぱ？……
えぇ…
女性希望
HAPPY END♡

狼の丸…否、九分焼き

たなか

「えっ？…ちょ、何これ！？」

夏の昼下がり、この状況がいまいち呑み込めていない彼女。確か、さっきはわかさぎ姫と湖でささやかなお茶会をしていた。菓子を食べて談笑した後、紅茶を一口飲んだ。何故かその後猛烈な眠気が襲い、寝落ちしてしまう。

その後、目が覚めたらこれである。今泉影狼は今、森の中で、何やら四角い箱の中に仰向けになって入れられている。自分一人が入る丁度良いサイズで、しかも何故か両手と腹部、あと首を縄で拘束されていて、身動きが取れない。影狼はどうにかしてこの状況を整理してみようと頑張ってみたが、考えれば考える程分からない。

「ねぇ、何よこれ！？どういう事？私をどうする気？ここから出してよ！」

拘束された身体で、こんな事をした誰かに向かって叫ぶ。

「ねぇ、いるんでしょう？何が目的か知らないけど、今放してくれたら許すから！」

声を少しばかり張り上げてみても、まるで反応が無い。虚しくなったのと、これから自分がされる事が予想出来ない恐怖を半々にしながら、影狼はただそこに横たわっていた。

その時、外から箱の縁に、手が伸びるのが見える。息を呑んで目を凝らすと、頭が見えてきて、そのままある者が姿を現す。

「影狼ちゃん？」

「…えっ」

「……ひ、姫ぇ！」

「あらあら影狼ちゃん…」

その正体は、先程まで一緒に茶を啜ったわかさぎ姫だった。一番最初に仲間に見つけて貰って安心した影狼、とかく助けを求める。

「助かったぁ！聞いてよ姫！何か気が付いたらね、こんな事になってんの！さっぱり意味が分からないの！姫が来てくれて助かったよ！」

考えがいまいち上手く纏まらないが、とにかく今思いつくだけの語彙を用いて境遇を説明する影狼。それを聞いた姫はただ笑顔で頷いていた。

「ここがどこで誰がやったか分からないけど、とりあえず色々縛られてて動けないの、早く解いて！」

影狼が助けを乞うと、姫が笑顔を崩さぬまま、こう切り出す。

「やっと起きたのね」

「…えっ」

彼女の一言に、影狼は耳を疑った。

「ひ、姫、どうしたの…？」
「あら、まだ気が付かないの？もう、鈍感ねぇ」
「ど、どういう事…？」
「決まってるでしょ、これ全部私がやったのよ」
見下ろしながら言う姫の言葉に、影狼の表情が凍りつく。
「どういう事？全部姫がやったって…」
「そのまんまよ。睡眠薬入りの紅茶を飲ませて、影狼ちゃんを眠らせて、それからここまで運んで、あれこれやったの」
と、肘をつきながら回想する風に喋る姫。彼女は睡眠薬を盛って眠らせた後、森の中まで一人で運び、鉄と木材の二重構造で出来た箱の中に影狼を入れ、中から出れない様に両手を後ろ手に縛り、更に腹部と首周りにまで紐を回し、箱の内部に括りつけた。
「ここまで運ぶの大変だったのよ、ほら私、足じゃなくて尾びれじゃない？だから影狼ちゃんを運びながらここまで来るのにくたびれちゃって」
姫が苦労話を聞かせてきた。そんなのを余所に、影狼が恐る恐る聞いてみる。
「え…と、姫、どうしてこんな事…」
やけに声が震える。それを聞いた姫、涼しい顔でこう答える。
「どうしてって、決まってるじゃない」
「影狼ちゃんを食べる為よ」

影狼の顔が一瞬にして青ざめた。笑顔を崩さずに言う姫の様相からは想像もつかないが、確かにそう言った。しかし言葉のあやというのもあるのでもう一度聞く。
「ど、どういう意味で…？」
「あら、そのまんまの意味よ、影狼ちゃんのお肉を隅々まで食べちゃうの」
「性的にで無く…」
「うん、物理的に」
影狼が言葉を失った。これから自分の身に起こる事が最悪だという事が分かってしまった。
「うそ…どうして…？」
影狼が震える声で聞くと、姫がゆっくりとした口調で答える。
「んー、昨日何となく、影狼ちゃんって食べたらどんな味がするのかなぁって、気になっちゃって。そんな事を考えてたら、本当に食べたくなっちゃって」
姫が、身動きの取れない影狼の頬を指でつつく。影狼の頭の中でいまいち理解が追いついていない。しかし姫は関係無しに話を進める。
「やっぱり食べるとなったら丸焼きよねぇ。外はカリっと、中はジューシーなお肉…想像しただけで…」
ここでやっと理解が追いついてしまった影狼。一気に血の気が引き、刹那、足掻きだす。

「ちょ、ちょっとやめてよ！いくら何でもそんな冗談…」
「あら、冗談なんかじゃないわよ？影狼ちゃんが大好きだから、食べてみたいの」
「はぁ！？正気なの！？」
「正気よ。全部焼いちゃうのはいくら何でも可哀想だからホラ、足だけ出してあげてるじゃない」

姫の言葉に、影狼がハッとする。確かに両足だけは少しばかり自由に動かせる。実は箱に全部入れず、側面に穴を開け、そこから影狼の両足を外に出した。結果、箱の側面からは影狼の両足、下腿の丁度中間部分から先だけが突き出ている形となっている。その穴のサイズは彼女の足にぴったりとはまっている。
そういえば足元の風通しがやけに良かった。そして足首が可動する事を確認すると、せめてもの抵抗でそのまま動かしてみる。すると姫がそのまま足元の方へと赴いた。

「そう言えば影狼ちゃん、結構自分の体臭を気にしてたわよねぇ」
「えっ！？そ、そうだけど…」
「でも、素足で靴なんか履いちゃって、これじゃあ臭くなっちゃう筈だわ」
そう言って影狼の足首を掴み、靴を脱がせる。現れたのは透き通った綺麗な足。その外観とは裏腹に、素足履きで蒸らされた足からは、脱がせた瞬間結構な匂いが漂う。その足裏を一度見た後、顔を付けてすんすんと嗅ぐ。
「ね、ねぇ何やってるの？」
鼻息を感じた影狼が弱弱しい声で訊くと、
「うーん、やっぱり影狼ちゃんの足、臭いわねぇ。これじゃ食べられないもの」
という姫の声。その声はやけに恍惚としており、これが元もと自らの体臭に嫌気がさしていた影狼の羞恥心に拍車をかける。
「いやぁ…やめ…」
「こんがり焼けて食べられちゃって、この世に残るのはこんなに恥ずかしいまでに臭いあんよだけ…あぁもう楽しみー」
「嫌ぁ！やめてよそんなの！どうせだったら全部食べてよ！いや食べないでよ！」
最早パニックに陥っている。顔を真っ赤にしながら遂に涙が零れてくるのを余所に、姫は靴を履かせ、いよいよ準備に取り掛かる。そんな時、影狼が涙声で姫に問う。

「ねぇ姫ぇ…もうやめてよぉ…私何か悪い事したんだったら謝るからさぁ…」
影狼のこの一言を聞いて、姫は軽く笑う。そしてまた影狼がいる箱の中を覗き込む。
「だから違うのよ。ふと食べてみたくなっちゃっただけなの。影狼ちゃんは何もしてないんだから」
「だったらやめてよぉ！ねぇお願い、何でも言うこと聞くからぁ！」

ここにきて命乞いを始める影狼。しかし相変わらず泣き顔を見せる影狼に向かって微笑みを向けるだけの姫、影狼の頭を撫でながら更に言う。

「んー、泣いてる影狼ちゃんもかわいい。じゃあ、あなたのお肉をおいしそうに食べてる所を、天国から見ててくれればいいから」

この言葉で、影狼は地の底に突き落とされた気がした。どう転んでも助からない、そう感じた彼女の顔は次第に恐怖に強張る。そして遂にそれが声となって堰を切る。

「いやあああああ！！」

影狼の叫びが空しく木魂する。それから直ぐに姫が本格的な準備に取り掛かった。

影狼の泣き叫ぶ声を心地良いＢＧＭとしながら、嬉々として藁を拾い集める。そして抱えたそれらを箱の中にぶち込む。一方で中に投げ入れられたものを見た影狼は、いよいよ自分の身に起こる結末を悲観し、力を振り絞り暴れて抵抗する。箱の中で絶叫しながら暴れまくるものの、束縛の前では空しく、ただ自らの身体を打ち付けるだけに過ぎなかった。それでも構っている暇は無く、力の限り命乞いを続ける。

「いやあああああああ！なにこれやめてやめてやめあああ！！！」

箱ががたがた音を立てる程の暴れっぷりだが、姫には響かない。その悲痛な程の悲鳴は鬱蒼な森の葉達に吸収され、かき消された。

「やめてたすげでしにたぐないよおおおおおおおおぉぉぉぉ」

影狼の顔面が涙やら色々な体液で汚れているが今はどこ吹く風。それ程のパニック状態。そんな中、姫は油を手にし、箱の中にふりかける。よく燃える様に、全体にまんべんなく。

「やだ！やぁだぁ！やめでぇいやあああああぁぁぁぁああ」

これ程までの必死の命乞いは姫に届くどころか、食前酒の如く甘美なものに変換されていた。影狼の悲鳴や怒号を聞いて彼女は恍惚にふける。そしていよいよ、下準備を終えた姫は、笑みを浮かべながらマッチに点火する。その火は盛んに燃え上がっている。これをそっと箱の上部へ持っていく。小さい火だから消えない様に慎重に。そして影狼に見せられる位置まで来た。姫は影狼の頭上にこれを掲げる。

「ほら見て影狼ちゃん、今からこんがり焼いてあげるからね。大丈夫、絶対おいしくしてあげるから」

火を見た瞬間、影狼の抵抗と命乞いは頂点に達する。

「あぁっ、いやあああああ、だずげでしにだぐないいいいいぃぃ」

暴れすぎて身体を打ち付け、頭から少々の血が出ている事などお構いなしだ。

「あらあら、聞いてないわぁ、残念」

そして頬笑みを浮かべながら、手に持っている火を離し、落とす。

「あああああああああ！！！」影狼の絶叫が最高頂になる。間もなく、その火は影狼の身体に付き、染み付いた油に反応し、燃え広がる。そして遂に箱の中全体が灼熱の炎に包まれた。

「あああああああああああごごごごぼぼぼぼぼおおおおおおおお」
影狼の断末魔が炎の中から響き渡る。炎は始め数メートルもの火柱を形成したがしばらく経つと丁度良い具合に収まり、箱の中のものを燃やし続けた。あっという間に火の手は広がり、中で焼かれているものはまだ断末魔の叫びを響かせながら、ここ一番の暴れっぷりを見せている。それは箱がひっくり返ってしまわないかという程で、その光景をみた姫はうっとりとしている。
「ごごごごごぐぐぐぐぐうううぐぐおおごぼぼ」
影狼の長い断末魔はまだ続いている。それは最早言語どころか声と呼ぶにも相応しく無いものだった。しかし段々大人しくなっていく。炎はまだ衰えず燃え盛る。
「まぁ、素敵な燃え方…このまま強火でこんがり焼いちゃうわよー」
姫は若干うっとりしながらこれを眺めている。橙色と黄色、それから赤が織混ざって一種の芸術みたいに見えた。やがて影狼の声が完全に止み、命乞いに暴れる事も無くなった。あるのは容赦なく箱の中を燃やす炎。完全に大人しくなったら後は焼き上がりを待つのみ。心を躍らせて火が止むのを待っていたら、視界の隅に何かが蠢いているのが見えた。
その方へ視線をやると、箱の側面から突き出た両足が、その足首を激しくばたつかせている。燃やされた身体と裏腹に、唯一無事な下腿が、調理されている身体の代わりに身振りで断末魔を表している様だった。その動きに心魅かれた姫がすぐさまそこに寄り、ばたつく足を撫でる。
「あらまぁ、足をばたばたさせちゃって。影狼ちゃんもやっぱり食べて貰うの嬉しいんでしょ？素直じゃないんだから」
足を愛でながら微笑むわかさぎ姫。そうこうしている内に、炎の勢いが段々弱まって来た。もうすぐ完成する。色々用意する為に最初の位置に戻る。焼き上がる音が段々と聞こえてくるのが耳に癒しになる。
そして数分後、火が完全に消えた。肉が焼き上がった合図だ。直ぐに行くのは流石に熱すぎるので少し冷めてから取りかかった。中を見てみると、そこには見事な焼き色を付けた、先程まで影狼だった肉。はやる気持ちを抑え、燃焼によって出来た灰や煤を払って外に出す。そして入れ物を解体すると、その全体像が更に鮮明になってくる。濃い茶に色付いた表面がクリスピーの様な食感を想起させ、食欲をそそる。そして漂う肉の焼けた匂いと影狼独特の臭みが鼻腔を突き、空腹に拍車をかける。その光景を見下ろし、姫は心を躍らせる。
「わぁ、影狼ちゃんのこんがりとした良い匂い！おいしそうだわぁ、大成功…あら？」
ふと頭部の方を見てみると、ここだけ焼けすぎて黒焦げになっている。というより、焦げまくって炭の塊と化していた。手でつついてみると、ぼろぼろ崩れ落ちる。触れば粉々になり、とうとう粉末状になってしまった。
「まぁ、影狼ちゃんの可愛いお顔が焦げちゃったわ。脳みそも食べ

てみたかったのに、これじゃもう駄目ね、残念」
溜め息をつきながら、炭化して粉々になった頭部をかき集めてその辺に撒く。

それより、調理に成功した部位。視認するだけで美味しそうな匂いが食欲を掻き立てる。ただ焼くだけという原始的なものだが、最高の肉ならこれだけでも旨い。いよいよもって我慢出来なくなり、まず胸部にかぶりついた。
表面は軽く焦げ目が付いた茶の焼き色、そこに歯が入ってパリッと心地良い音が響く。そして中の肉に入っていく。影狼は貧乳な方で余計な脂肪は付いておらず、若干硬めだが、肉本来のジューシーな味が口に広がる。一口ほおばり咀嚼してみると、食感は丁度良い歯応え、噛む程に迸る肉汁、そして特有の芳醇な風味が刺激する。満足気な表情で噛み締める姫。
「んーっ、思ってた通りだわ！外はパリッとしてて、中はしっかりと歯応えもあって、噛めば噛むほど旨みが出てくる！美味しい！」
あまりの旨さに彼女は舌鼓を打つ。そして口の中の幸福が冷めやらぬ内にもう一口、また一口とむしゃぶりつき、頬張る毎に感嘆する。程良く火の通った身が彼女の舌を蕩けさせる。気付けば胸部は食い尽くしてしまい、骨だけが残った。

こうなると食欲は止まらない。次は腕。底の方に位置していた為、火の通り方が他の部位とは違ったが、燻製の様になっており、また違う芳香を醸し出す。軽く筋肉がついて引き締まった二の腕にまずは食らいつく。それは思っていたより柔らかく、また筋の肉は舌の上で溶ける。赤みの残る肉は弾力があって柔らかく、少し塩気があった。
「まぁ凄い！影狼ちゃんがシャッキリポンと舌の上で…これはやめとこう。とにかく、意外な食感ね、まるで燻されたみたい。でもお口の中でとろけるなんて、また違った楽しみ方で良いわね」
そしてその芳醇な味わいを充分楽しんだ。お次は腕、ここは二の腕より硬かったが、その食感を余す事無く楽しみ、骨周りを吸って深い旨みを頬張る。
「んー、骨の周りが一番おいしいのよぉ、チューチューすれば幸せー」
そして数分後、両腕も食い尽くした。

さてお次は遂に腹に来た。そこが出ているかどうかで体重の増減や羞恥心等諸々が決まる、あそこであるが、影狼のそれは上手い具合にくびれ、かといって痩せこけてもおらず、適度な肉付きで申し分ない。その魅惑的な脇腹にむしゃぶりつく。
するとどうだろう、表面のクリスピーな食感は毎度の事ながら、そこから更に歯を入れると容易く噛み切れる程柔らかい。腹に付いた多少の脂肪は溶けて肉汁となって溢れ、更に霜降りの様なきめ細やかな肉は舌の上に乗せれば直ぐに蕩け出し、濃厚でいて上品な味や香りが広がる。

「んーっ、影狼ちゃんのお腹！濃厚な味が口いっぱいに広がって、ほっぺたが落ちちゃいそう！すぐに呑み込むのが勿体ないわ！」

その味は姫を唸らせるものだった。口に入れた肉を味わう様に転がす。脂身は癖が無く重くも無く、ただすうっと蕩ける。濃厚な肉汁と芳醇な風味が五感を刺激するのを充分に愉しみ、呑み込む。その後もう一口、また一口。それ毎に口の中で転がし、恍惚に浸る。そんな事を繰り返す内に、あと一口となってしまう。名残惜しいが口に入れ、それだけは時間をかけて味わった。そして極上の腹も完食。

その後は太腿。ここはもう勢いでかぶりつく。脂の乗ったハムの様な塩気、ねっとりと舌に乗る濃厚さに舌鼓を打つ。続いて内臓。特に腸はぷりぷりとした食感で、噛めば噛むほど旨みが口の中に広がり、何度も噛み締めた。噛み切り辛いのが少し難儀したが、それでも美味だった。

こうして、全ての肉を完食した。わかさぎ姫は満足気に腹をさする。

「ふぅ、ごちそうさまでした。やっぱりおいしかったわぁ。影狼ちゃん、天国で見てくれて…あら」

ふと、ただ一ヵ所忘れていた事に気付く。箱の側面から出して、唯一燃していなかった両足。特筆すべきは、あれから大分経っているのに未だ痙攣を続けているのである。足首から下をばたつかせているこの光景に姫は心を打たれ、すぐさま足の方へ寄る。

「そうだ忘れてた。影狼ちゃんの臭くて恥ずかしいあんよ…まだぴくぴくしてるのね、可愛い…」

恍惚としながら靴を脱がす。現れた先程の素足。優しく撫でながら足裏を鑑みてみると、足指が細かく痙攣している。その妖艶な動きに我慢出来ずつい顔をくっ付ける、そしてそのまま匂いを吸い込む。

すると汗で蒸れた濃厚な匂いが鼻を突く。温かい足裏が優しく鼻を包み目の前で指を踊らせる。

「あぁ、影狼ちゃんの足の匂い…食後にぴったりな大人の嗜み…良いわぁ」

嗅ぎながら恍惚に目をとろんとさせる姫。この勢いで思い切り堪能する。まず足裏を一舐め。今日一番の塩気が姫の舌に絡みつく。そしてくすぐったさからか、足指の震えも激しくなる。今度はその足指を咥えると、大ぶりな親指と小ぶりな指達が口の中で遊び回る。

「あらやだ、何かいけない事に目覚めちゃいそう…」

「でも良いわよね、影狼ちゃんだもん」

そして姫はそのまま食後酒を嗜むかの様に、しばし影狼の足でよがった。

東方二次創作カニバリズム（食人・食妖）本

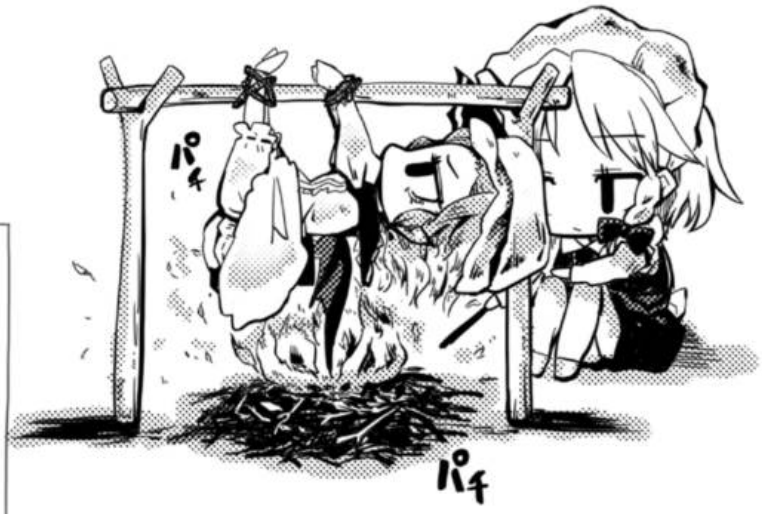
R-18Gな幻想郷のごはん合同誌

※R調整ページです…

by. magifuro

レミリアちゃんの羽先が食べたい。いろどり

朝寝ていたら



焼かれていた

急にお嬢様の手羽先が食べたくなってしまって…

TEBASAKI

ハァ

仕方あるわよね

それ

プス

プス

全く…フンッ

ブチィ

ブチィ

ふんッ仕方ないわね……

コキ

コキ

ザッ

あちちっ ちちちちっ!!!

後先考えずに解きますから…

羽くらい、再生するし上げるわよ

ブチ

ブチ

ポイ

ポイ

うわぁ……

ポイ?

吸血鬼って便利ですわね

※調理中

ジャアアア

出来ましたよ

折角ですので一緒に試食して見ましょう

じじじ…

じぁーん

サイズおかしいでしょこれ

どうやって料理したのよ!

ホッ

ホッ

人サイズですしね…あ、調理はパチュリー様の魔法で

魔法って便利ね……

ふむ、さすが私

美味しいじゃない

変な臭みはありますがいけますね

臭みっていうな

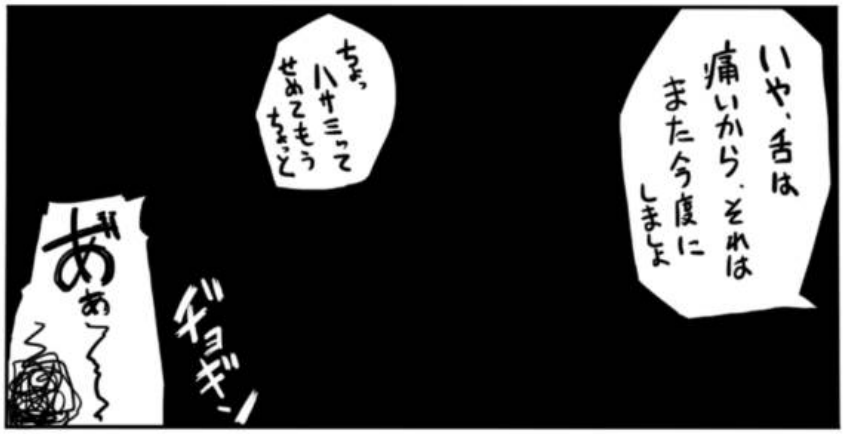
モニュ…

モニュ…

くみくみ

お嬢様の

タ・ン・塩♡



タン塩も食べたい

殺っちまったぁ!!

描いた人：唐沢栗史（カラクリ）

突然の変態

みょん
みょん
みょん
みょん

だ、誰もいる筈のない私の部屋でいきなり後ろから胸揉まれたもんだから驚いて…

ねぇ…おどろいぃ

わしっ

つい…スパッと

たぁ!?

だぁぁぁぁぁぁぁこれが文屋にバレた日にゃ何を書かれるか萃夢想妖夢とか萃夢想妖夢とか…

ど、どないしよ…ハッ！本体がなんともないって事は……

どうにか頭をくっつけたらまだなんとかなるかも…！

でも…飛び出ちゃった分をどうにかしなきゃ汚れちゃってるし…

スタタタタ

そうだ!!

スパァン

ゼラチン

ゼリー大好き幽々子様の為にゼラチンを買ったんだった…!!

これで!!

減った分を補う!

女の子はスイーツでできているのだ

ガガガガ

ペースト状にしたらゼラチンと砂糖…水を入れて…

お好みでレモン汁を数滴…

レモン汁

混ぜる!!う

切れた頭頂部も同様に作り…

ガガガガ

そしてこの・・・
巨大冷蔵庫で
・・・・冷やす！

2.5M

ゆゆ円
ゆ寺

ゴオ
オオ
オオ

プル

最後に頭頂部を
くっつけて再び
冷やせば・・・完成！

頭頂部の骨は後で接着剤で・・・

ポン

ただいま妖夢
お腹空いたわぁ

幽々子様
おかえりなさい！
お食事なら冷蔵庫
にあります・・・

あっ

アラ？
今日はなかなか
エキゾチックな
料理なのね

アホの子の脳はシワが無いって本当だったのね…

うわあああああああああ

☆いただきます…！

おわり

I, Robot

art and story By ニトロ基

製作者の
河城にとりさん

子供が大好きな
育児ロボットになるように、
28人の子供を殺して食べた
シリアルキラーの脳を
人工知能に組み込みました。

ダメだわこれ
1ミリも
誤魔化せないわ
ずる…
ずる…
お姉ちゃん

こんなのって
ないよ…
お姉ちゃん…

おいしい
パァァ…

一口
ちょうだい
ダメ〜〜
おわり

八意様……
これは一体……
お姫ビート食人現場
みしま
わかりきったことを
あなたはこれから美味しい料理になるのよ
え
どうしてそんな事を！
どうしてって……うさぎのお肉が食べたかったからよ
ええ……
……
それには日々の肉体労働により引き締まった身体を持つあなたがbetterな選択
不服でも？
～～っ……
前にあの子を食べたから、次点のあなたにしたの
は!?
うさぎならいるでしょうあなたのそばに！
コイツ友達売りやがった
ウドンゲはちょっと鉄っぽかったけど
アナタはどんな味がするのかしらね

あッ
ぴゅ〜
ジ
ジ
ずるるりッ
んッおッ
これよこれ……良い色してるじゃない
は
はっ
おいしくいただくには調理すべきだろうけど……やっぱり生(ナマ)も
捨てがたいわよね
っぷぷぷ
はむ
ぷち
とゆーワケで いただきます♥
あぶ ぶぶぶ
おおああ
このゴムっぽい弾力……生臭さもほとんどないし素晴らしいわね
師匠、私もそろそろ……
もちコース

ぐぶぶ…ぐぶぶぶ
ねぇ清蘭
びくっ
さっき私のコト売ったよね
ひどいなぁそんなコトするなんて
!?
かつてない理不尽を前にも漫符しか出すことのできない清蘭であった
まあいいよ
ドスんッ
美味しく食べてあげるからねーっ
ひっ…
つぷ
ぐぐぐぐ…
みちみちみち
ぎゅむ

んあッ
あー
あむり
ぽたたた
うん
生でも
すごくおいしい
うどんげ
私もお肉
いただきたいの
だけど……
そのための
杭ですよ
さすが
ジャン
クロード・ヴァン・ダム
……
脂身がほとんど無く
シンプルだけど
濃い肉の味……
ジューシーな旨味は特筆すべ
うつめ
清蘭に
(肉として)
負けた……
あら、うどんげだって
美味しくなかったわけじゃ
ないのよ
むしろ玄人好みで♥

あら
死んじゃいそうね
おかしいな……
玉兎はもっと頑丈なのに
精神的なモノじゃない？
なるほど
そうですね
ま、ここからが本番ね
で……これが清蘭の肉
そうわよ
うまい
でしょう、おいしいでしょう
まさかいつも一緒にいる奴がこんなにおいしいなんて

ねェ清蘭

ぜんぜん うれしく ないんだけど

ゴポ

ゴポ

なんでよー 名誉なコトじゃんか

八意様に 気に入って いただけるなんて

アンタ やられて みなさいよ

そういえば…… その八意様は?

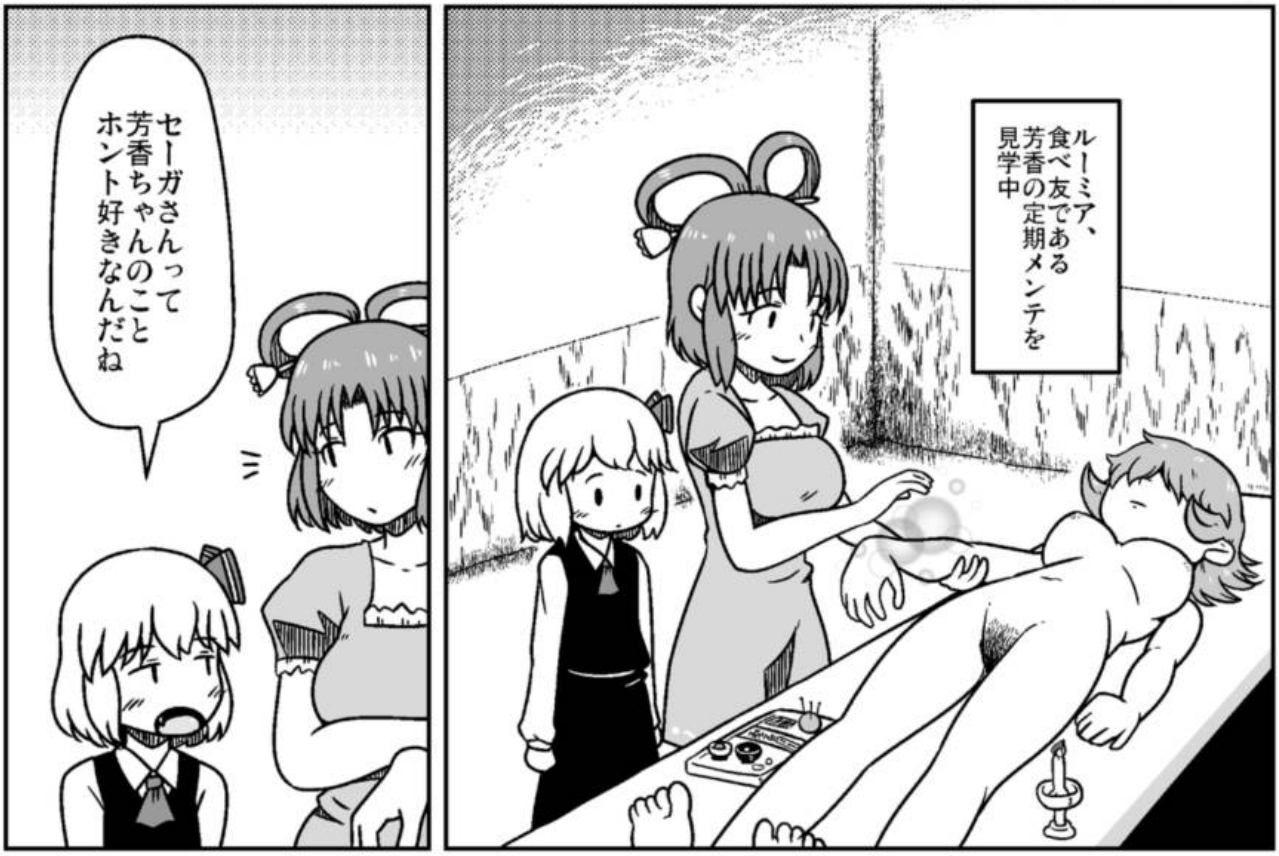
お礼を 言いたいん だけど……

バチッ

あぐっ…!?

おわり

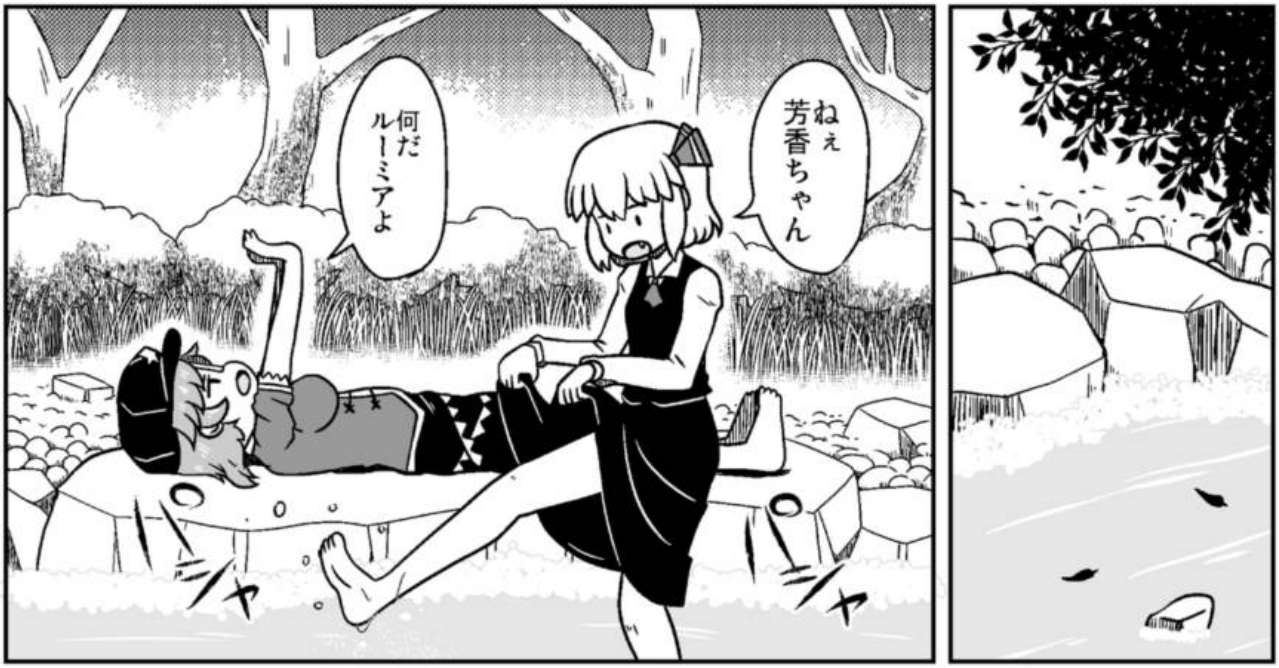
描いた人：フーポ


ルーミア、食べ友である芳香の定期メンテを見学中

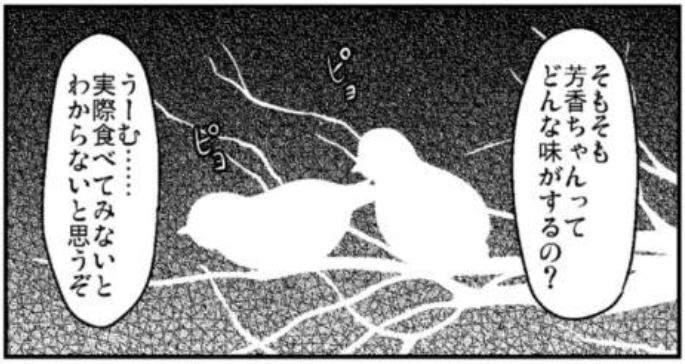
セーガさんって芳香ちゃんのことホント好きなんだね

それはもう……食べちゃいたいくらいに
ギュッ

食べちゃいたい？


ねぇ芳香ちゃん
何だルーミアよ
パシャ
パシャ

セーガさんが芳香ちゃんのこと「食べちゃいたい」って言ってたよ
なぬっ!?


そもそも芳香ちゃんってどんな味がするの?
うーむ……実際食べてみないとわからないと思うぞ
ピョ
ピョ

よし! ルーミア
私を食べろ!!
イートミー
ええっ

「聞くは一時の恥
据え膳食わぬは一生の恥」とか
なんとか言うだろう!!
いいのよ。
さぁルーミア来い!!
私を食べろ!!
よ…芳香ちゃんッ!
そんなに
迫られちゃったら
わ、私っ…
本気ニ
ナッチャウヨ?

ぐちゃ……
ぐちゃ……
セーガさんの
言ってたこと……
わかったよ
多分
好きな人って、
おいしいね。
悔いなし。
だがもちろん
キョンシーなので
腐っていた
あ〜
芳香ちゃんが
出てきちゃうぅ〜
ごろぴ〜
ごろごろぴ〜
W.C.
ぶりぶり
ぶりぶり
ぶりぶり
えっ

うましんぼ
まちのだがしや
ありがとうございました♥
またお越し下さいませ♥
帰りましょう！
こんな店では何も食べちゃいけない…うまいとかまずいとか…以前の問題だ！
あ、あの…何かありましたか？
このステーキは出来そこないだ…食べられないよ。帰らせてもらう!!
山岡 ゴロ　妖怪
待って下さい!! あの…明日…明日同じ時間にお店に来てください!!
わかった…出直してくる
素直。

次の日。

いらっしゃいませ
お待ちして
おいました♥

それでは…
席について
しばらくお待ちください

あぁ…
そうさせてもらう

お待たせしました♪

じゅうう

きゃほっ
こいつぁ美味そうだ！
でも…ナイフとフォークは
無いのかい？

バーン

おてもと

こちらを
お使い下さい♥

口のなかでとろける！
これは美味いよ！

パクー

箸で簡単に切れるね
柔らかい証拠だよ

山岡ゴロの上司
トニー副部長　妖怪

むしゃー

カァーッカッカッカッカッカ

誰だっ
何が可笑しい

海バラモン・U・山　妖怪

だから貴様は愚か者なのだ!!
その肉が柔らかいだけか？
カッカッカッカッカッカ
本当にそれだけか…
皿すべてを見て見るんだな!!

お前は…!?
海バラモン!!

皿すべてだとっ…

これは…
この小梅の様な…
付け合せは…

(SE:ギロ)

カッ

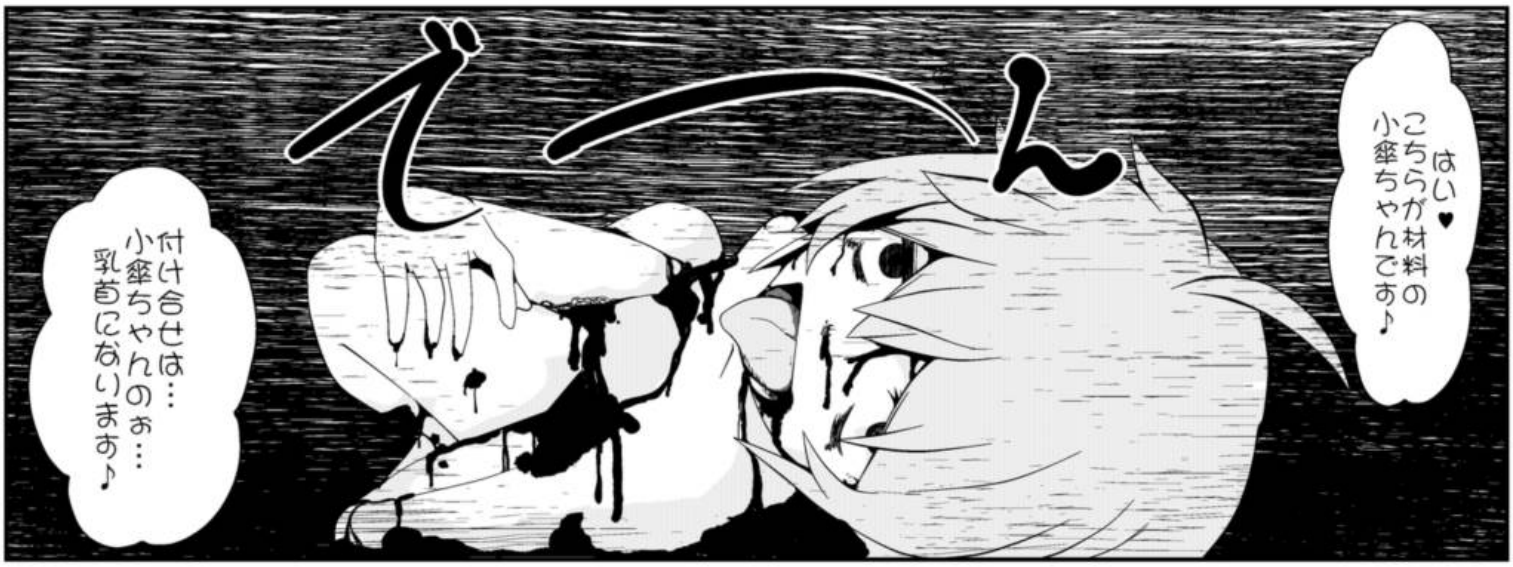
小梅なんかじゃない!!
こ、これも肉だ!!

バクムシャ

女将さんっ
これは一体…
この肉は一体…!!

うふ♥♥

気になりますぅ～？
このお肉は～…


はい♥こちらが材料の小傘ちゃんです♪
ぐーん
付け合せは…小傘ちゃんのぉ…乳首になります♪

……
おかわり…いただけるかな？

どの部位になさいますかぁ？

ワシはよこちち…じゃなくてスペアリブを頂こうか…
ごくり…
コブクロを貰おうか…
おわり

にとひな
マイルドにこみ
はちべー

あらにとり、貴女から私の家に来るなんて珍しいわね

えへへ～

今日は雛ちゃんに渡したいものがあってきたんだ

なんか変な形の包丁ね…これは一体なんなのかしら

一言で言えば「全自動伐採マシン」さ

なんか物騒ね…

ちゃんとした使い方をすれば安全だよ！でも誰かいるところでスイッチは押しちゃダメだから気をつけてね

ポチッ

あっ…

モード「自動切断」に切り替えます。

ちゃっ…！

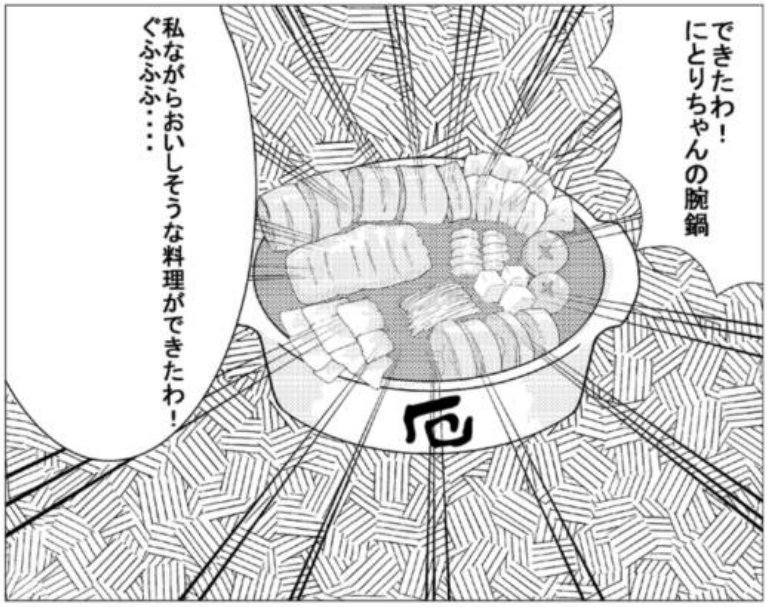
ザッ

にとり――――――っ！

バターン

ごめんにとり…
今元気になる食べ物作るからね…
血が足りないと思うしやっぱりお肉よね…でも丁度お肉を切らして…
うーん…あっ！あったわ…！

にとりには悪いけどお肉がないのなら仕方ないわよね
これでにとりもげんき…


できたわ！にとりちゃんの腕鍋
私ながらおいしそうな料理ができたわ！ぐふふふ…

ほら…ご飯作ったよお肉を食べて早く元気になってね…
にとり…

ねぇ、人間。

クッキーって知ってる？

ルーミアちゃんお菓子を作る？

描いた人：山嵜誠那

わたし、クッキー、食べてみたい。

甘ぁ～くて、サクサクしてて、おいしいんだって。

それで、

型でくり抜いて作るんだって聞いたんだ！

えっ？ちょっと待って何言ってんの、

クッキーっていうのは、アメリカ食文化圏における、主に小麦を主原料とした小型の

Wikipediaより引用

えい☆
ぐっ
クチャッ
ぷちぷちぷち

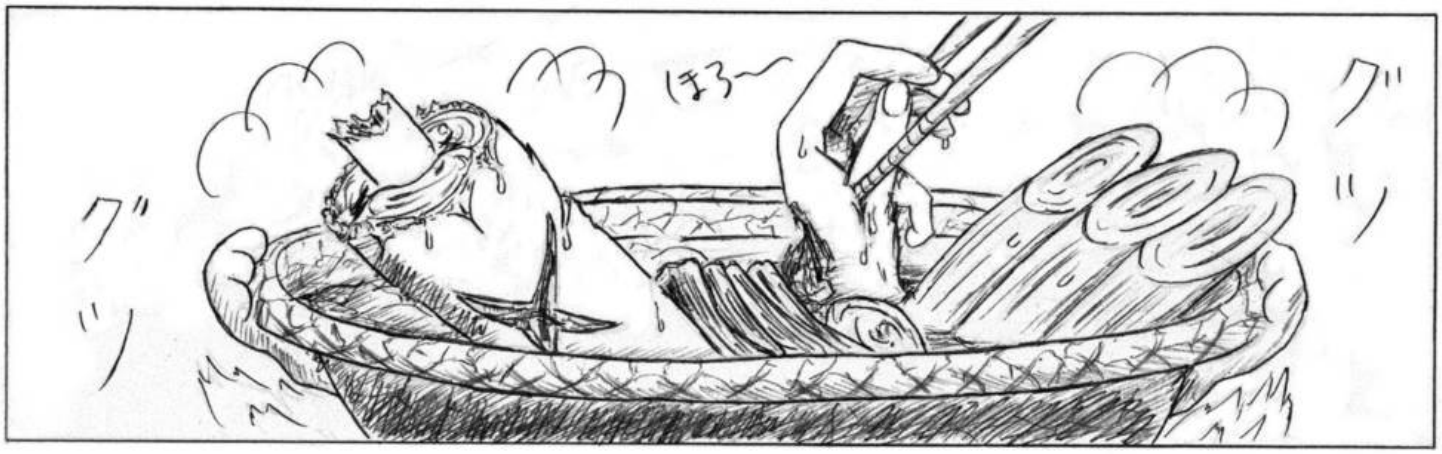
そんなこんなで…
でーきたっ
わぁ～♡
嘘…
私の手…

んー…？
可愛い形で楽しいけど…
クチャ
コリコリ
？
サクサクしない…
いつもと同じ味
おしまい

ジビエ ゆきすけ
ガチャ
ガチャ
ザッ
ハッ
カ

ピ〜〜〜
ピクッ
ピクッ
さわ
さわ
ぴと
ぴと
ドキ
・・・
ドキ
！
ドキ
トッ
トッ
トッ
ピ♡
トクン♡
グッ
グッ

ふいいー
サクー
パタタタ…
プチプチ


ほろ〜
グッ
グッ

できたー！

たべろー
なむー
…
ねこちゃんのおばか
完

まさか…

私達(ようかい)を捕らえる罠で人間が引っかかるとは…

怖いわー 偶然怖いわー。

あるのね～こんな事。

生き物は皆肉の塊
緋泉ヒロ

油断した…

トラバサミがあったなんて…

このマジックアイテムで時を止めてたのね？

ジャラッ…

なるほど～。

これが無ければ貴女はただの女…

ね？

…それで？

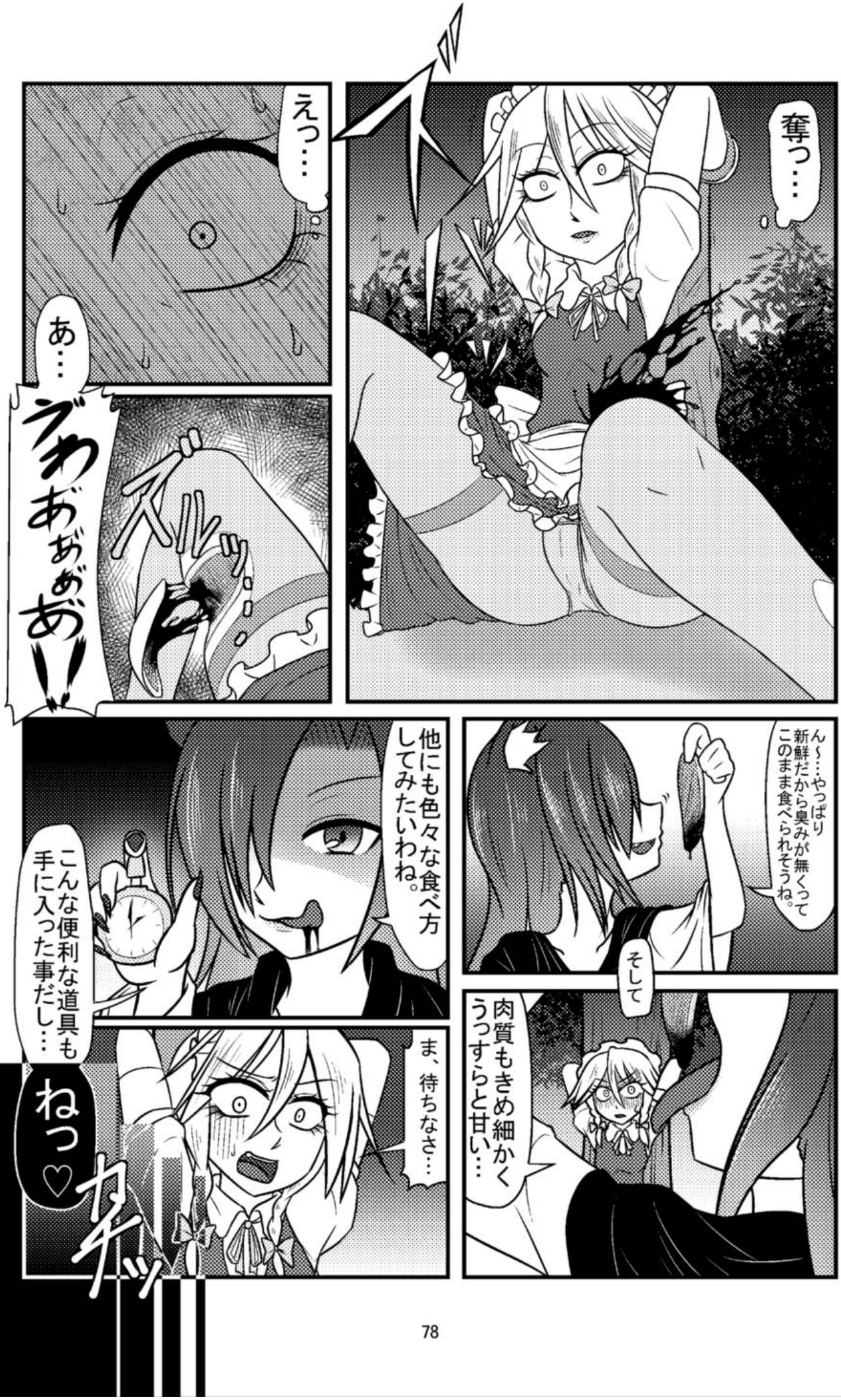
いったい私をどうする気かしら？

…マズい。

手も足も出ない今私は赤子同然…

スッ…

あの時計を何とかして…


奪っ…
えっ…
あ…
ずぁぁぁぁぁ!!
ズルッ
ん～…やっぱり新鮮だから臭みが無くってこのまま食べられそうね。
そして
肉質もきめ細かくうっすらと甘い…
他にも色々な食べ方してみたいわね。
こんな便利な道具も手に入った事だし…
ま、待ちなさ…
ねっ♡
カチッ

やめっ……！

あっ……？

あ…あぁぁぁぁあ

はい、おしまい♡

ブツ

ブチブチブチブチブチブチブチブチ

ぎぃぃぃ

できたっ♡
今日のご飯は豪華〜♪

サクッ

ん〜っ衣サクサク、お肉柔らか〜い♡
やっぱ唐揚げはこうでなきゃね

ほら、貴女も食べて良いわよ？
冷めちゃうと美味しくないし。

あ、もう手足が無いんだっけ？ごめんごめん。
それにしても時計の力で首だけで生きてるなんて何だか変な感じね？

コロ…シテ…
おネガい…シます…
タれか…わタ…シを…
シな…セ…て
よかったわね、これから全身食べる所毎日見られるわよ♡

小傘のキッチン！
今日はぬえちゃんフルコース！
あが・・・
活きのいいぬえちゃんを余すところなく使いました！
あ・・・
ぬぇぇーん
kamiya

ああぁ～❤早速食べてみましょう！
はー
はー
いただきまーす❤
ぎちゃ
ぎゅ
あぁん
う～んっ
ぎゅ
ぎゅ
凄く柔らかくて美味しい❤

最後はぬえちゃんの脳みそでーす❤
ぷちゅっ
かりっ
や…もう…やめ…
ぐるん
ぐちゃぐちゅぐちゅ
おろぉ…
ひゃめ…
あっ…
ごちそうさまでした❤
かーらっ
次はだれにしようかなぁ❤
にーちゃあ…

じゃあ…
パンッ
ホカァ…
できた〜〜〜♥
いっただき
ま一ぁすっ！
うき
わく
わく
うき
魔理沙のお肉事情
描いた人影朗
パク
キラ
キラ
カチャッ
カチャッ

ん～～♥
ハァ
アァ
アァッ
うんまあああああい!!
この肉汁!!でも全然しつこくない!!
じわぁ
もぐっ
じゅるっ♥
もぐっ
やっぱいい肉は違うな～～～
酒も進んじゃう♥
ゴク
ゴク
もぐっ
もぐっ
もぐっ
もぐっ
完食
あ、もう食べちゃった
ん～…
ガバッ
おかわりだな!!

ゾク
あ〜〜〜♥
ゾク

ハアッ
ハアッ
次はどこを食べようかな？

迷っちゃう♥
ギラッ

普通の人間でも努力でなんとかなると信じていた
めざせ！☆まほう使い
でも、無理だと気づいてから
ゴリッ
ゴリッ
魔法使いになるため身体から変えていくことに決めた
ゴロッ…
結局、魔法使いなんてどうでもよくなった
ジュウウ
アリスとパチェが美味しすぎて
あーーーん♥
食人に魅了された
ドキ
ドキ
もう最高～～～♥
でも
あと二、三日でなくなるなー
ペロッ
キュンッ♥
あっ！
次は霊夢にしようかな♥
終わり
4

まどろみ
猫人狩り
あたたかくて
痛くて
とける
あいまいで
とける
突き刺さる
溶ける
溢れる
あなたのなかみが
わたしのなかみが
とける
溶けて混ざって
それで…？

いたいのさとりっ
やめてっ お願いだから…っ
自分の世界に籠もらないで
私を 目の前にいる私を
ちゃんと見て！向き合って！
おちつイてこンな事ャめ……
……
わタシ……
愛しているのよ…さとりぃ♥
わたしノ「愛」アいシてるンデショ♥
えへへっ
ねぇもっト♥
イタくシて溶ケシてェ♥
私だケみて1ォ
こんなに内臓コ
ヒクつかせて待ってるのにぃ…
ねぇ…私と一緒にイっちゃお？

あ…？
あー…おなか、空いた、なあ
おくすりもっと
ふわふわ…
あーい
…甘い♥
あーっ♥パルスィ…好き好きい…大好きなの…♥
ああふわふわする…溶けてる…もっと気持ちよくなりたい♥
もっと薬飲…

はぁ…
…生だけってのも飽きてしまうわね
次は煮込んでみようかしら
さあパルスィ、私を満たして私はただ貴方に愛されたいの

ねぇねぇこいしちゃん あなたの血を飲ませて頂戴？

ええ……

……やだ……

まぁいいじゃない 一口だけ一口だけ

痛っ

もう……しょうがないなぁ……

んん……柔らかいお肉に滑らかな血の味がなんとも

もういいでしょ離して頂戴

ホントに美味しい……

えっ何？

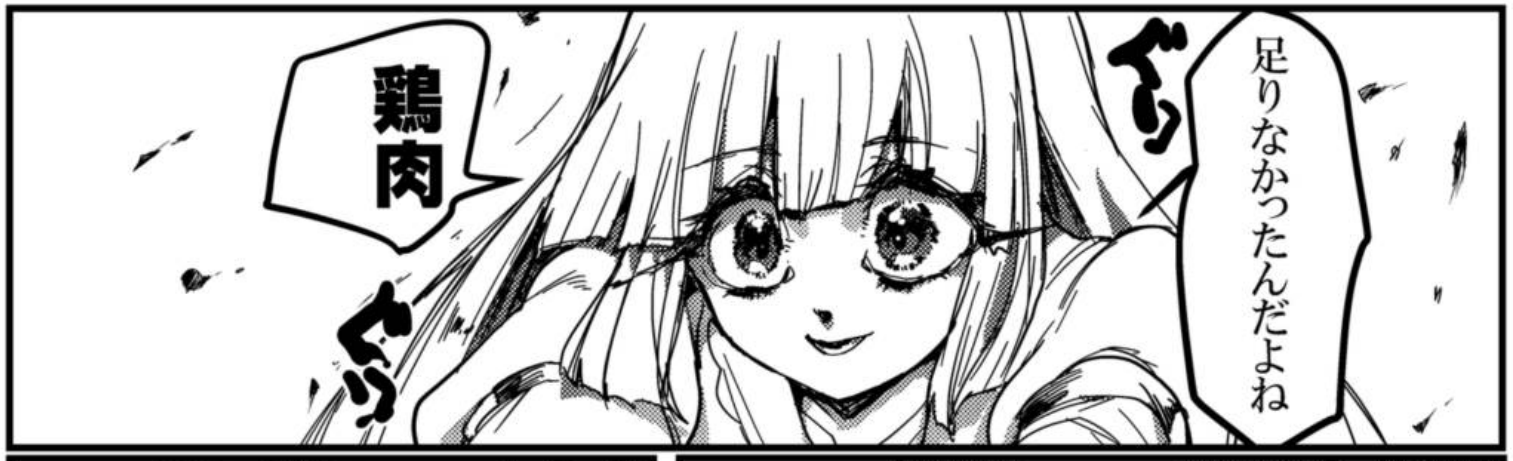
いぎっ？

詩季

な、な、なにを……やって
ぎゃっあぁ！
ブチ
ブチ
あぁ……
うぅぅぅ……
え……なに……これ
……ど、どうして……
そんな……
へへ……
ガリ
ガリ
ガリ
ゴクン
もっと……♡
やだ！
あげない！
ドキドキ
ヒッ
前から食べたいと
思ってたんだよね
骨の欠片まで……
ふっ
なんてね。冗談だよ
骨の欠片までは
食べようとは
思ってないよ
死んだら
勿体無い
ものね？
え？
何が冗談なのか……この状況？
私の腕を食べちゃったこと？
少なくとも美味しそうに
肉を食べる姿は、本物だった……
私これ生きて解放されるかなぁ……

あ、あの～…
オズ…
妹紅さんに呼ばれたケド…
ちょうどいい所に！
ちょっと付き合ってよ！
こんなところで何をするんだろ…
妹紅ちゃんパックン！
さく：三毛黒
あっも…
くるっ
こ

ズズ!
ザ
ふー
助かったー


足りなかったんだよね
鶏肉

今日の鍋でどうしても鳥入れたくてね~
手頃な鳥系のザコ妖怪をって探してたところでアンタが来てくれたってワケ

冬はやっぱり
鳥妖怪の肝に限る♡

帰宅後♥
わぁっ！
ぷるぷるで
すっごく美味しそう！
ぷりゅっ♥
やっぱり
私の目に狂いは
なかった♡
ありがとう
全部位、
おいしく食べさせて
もらうね

三時間後
できたっ♡
召し上がれ！慧音！
ドン！

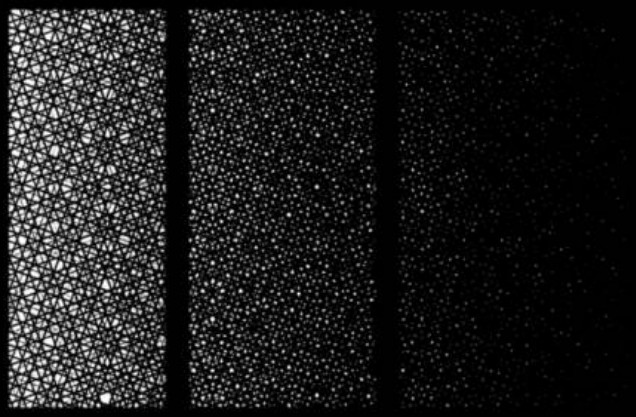
な、
何だこのごちそうは！
風邪ひいちゃった慧音に精をつけてほしくて…張り切ってみたよ！

…
もこぉぉぉ
うるうる

命は巡るものです
無駄など一つもありません
だから今日の自分を生かしてくれた命に感謝しましょう。
お残しは許しまへんで。
あーん
納得いかねえ

おしまい♡

あとにす



ずりゅ
ずりゅ
[redacted]
ぐちゅ
ぐちゅ
おあ
ごちそうさま、魔理沙

『プロパンガス』 描いた人:レキシタイふのじ

ここは
ゆめのせかいのかたすみ
いくちゃんと
とじこちゃんと
らいこちゃんが
なかよくくらしています
きょうのそらもようは
おおあれのようですが…

も～
ほんっと
酷い嵐！

ぷっぷぴょぷっ!!
いってーーーーーっ
ぎゃーーーーっ
うわ～ぷにぷにしてる♡
どうよ美味しそうでしょー
でも大根っぽくないね
おまえらアタシを大根扱いすんな
はーっ
はーっ
はーっ
ツキツキ
カ
ッ
チッ
次はナガエちゃんの番だよー
ふよふよ
おうちで作るつみれって格別だよねー

ボレっ
ビチィ
ビチィッ
ビチィッ
ちょっとバンバンだこいらっちゃ
あれもしれぇ
なーんつって
この、くらいでじゅうぶん、かな…っ
はあっ
はあ
ボロ…
ナガエちゃんおつかれーちょっと休んでなよ
おろし生姜と刻み葱あと食塩で粘りを出して…あ、卵を用意しといて
そがちゃんは料理上手だねー
なんだよ照れるじゃんよー
あとはあたし達が調理するね！
ところでライコは料理できんの？
できない！
できねーのかよ!!
最後は雷鼓ちゃんの番…でもドラムセットでしょ？どこを食べるの？

脳味噌…はやめた方がいいな
これ以上こいつがアホの仔になったら困るし
なんであたしが既にアホの仔なの前提なのよ!?
お腹の中身を食べてもらいたいな
おっモツいいじゃん♪
鮮度のいいものは甘くておいしいもんねー♡
ぬりゃんっ♡
ぅっ♡
おぉぉぉっ♡♡
じぶんのおなかきっちゃった……♡
ぅっ♡
あぁ♡
あぁ♡
すーっ♡

ひとりじゃ
離しそうだし
手伝ってやるよ

すっ

お腹の中が
すっごく
ぐちょぐちょ…

もっといっぱい
声を出しちゃえ

あ〜〜〜♡

なんだか雷鼓と
セックスしてるみたいで
こっちも興奮するな

かわいい♡

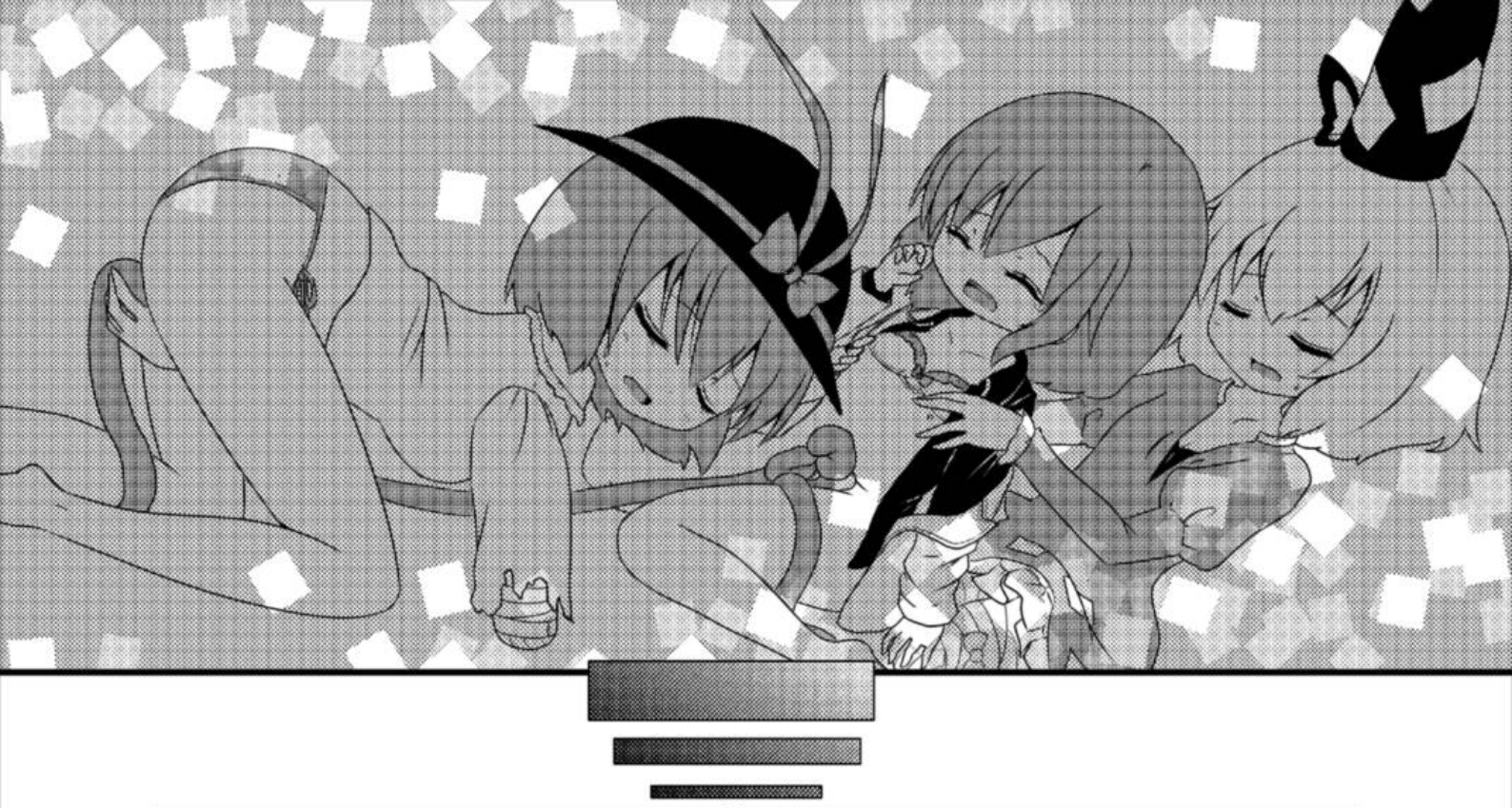
あ♡

ぶるっ♡

ぶるっ

ぶるっ

ぶるっ



ナガエちゃんのつみれとライコのモツとアタシのは…なんだろ？
大根でしょ？
違うって言ってんだろ!?

まあいいやとにもかくにも

いただきまーす♡

茶なんて飲まないと…
？
何であんた達と
小傘農場
描いた人：細井コウゾウ
ネタ出した人：samin

珍しい野菜鍋食べさせるって言うから来てみれば
まぁまぁ
食事が出来るまで同業者と語らいをね
鍋だって今早苗が
おまちどー
待ってました
ドキ

守矢神社特製
野菜鍋でーす❤
ほかあ…
おー♡
ほか
ほか
これ野菜…？
そうですよー

見た目はお肉なんですけどね
さ
めしあがれ❤
おいしい！

たいしたものね
それもそのはずです
どやぁ…
作るのに苦労したんですから詳しいことは秘密ですが
野菜とは信じられないけどな
ほらお酒もあるよ
コレあんた達も手伝ってるの？
神社も暇だしね

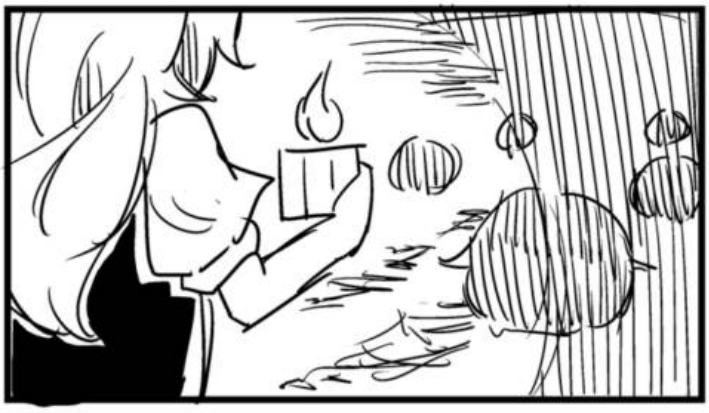
ちょっと
お花摘みに
行ってくるぜ

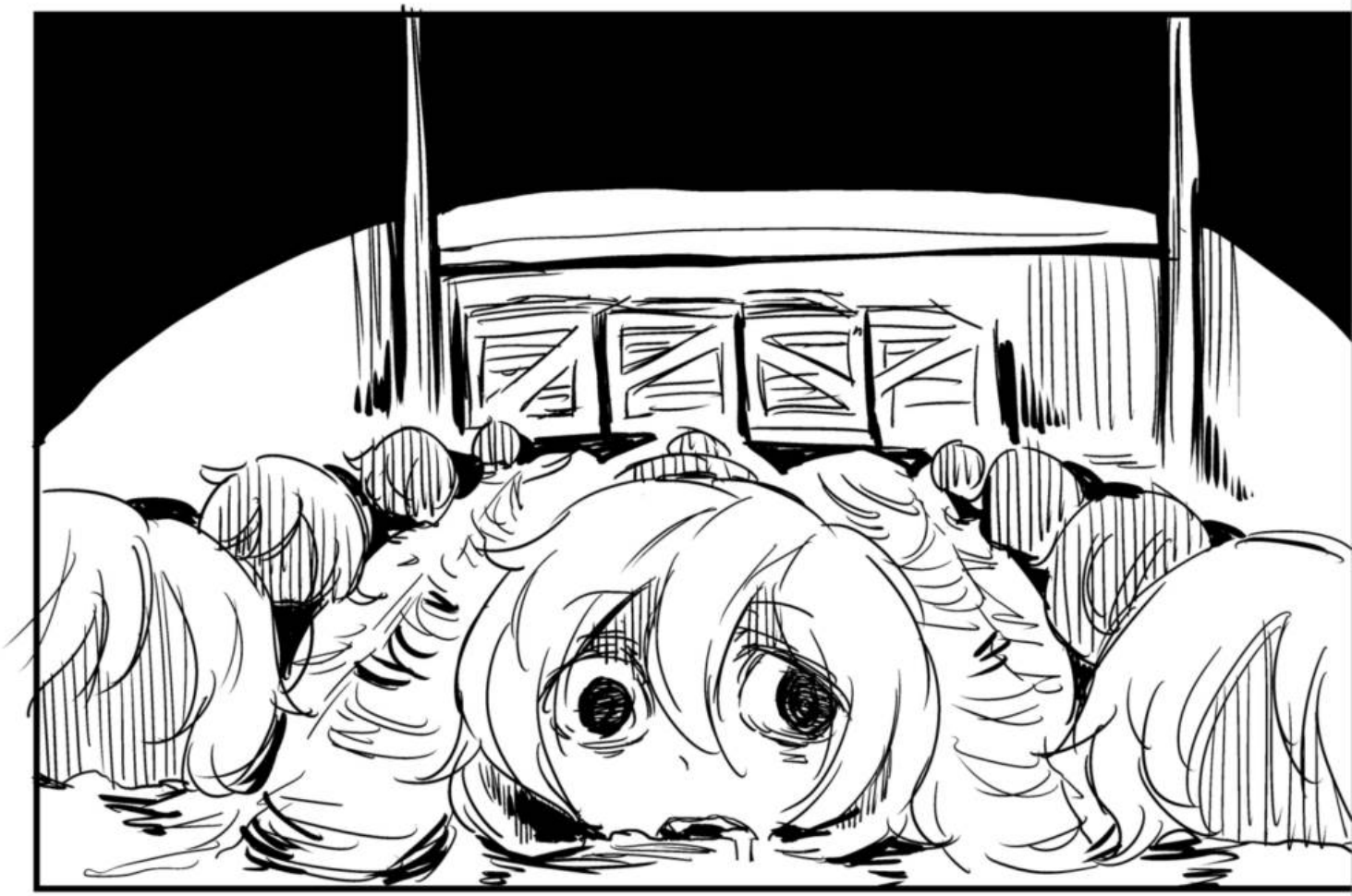
でしたら
場所を
ああ
平気平気

ギ
しめしめ

秘密と言われたら見ろって意味だよな～❤
キシシ
にしても神社の裏に畑なんてね
おっ
わし
わし
ギ
おっじゃま～～

暗いな
ボッ



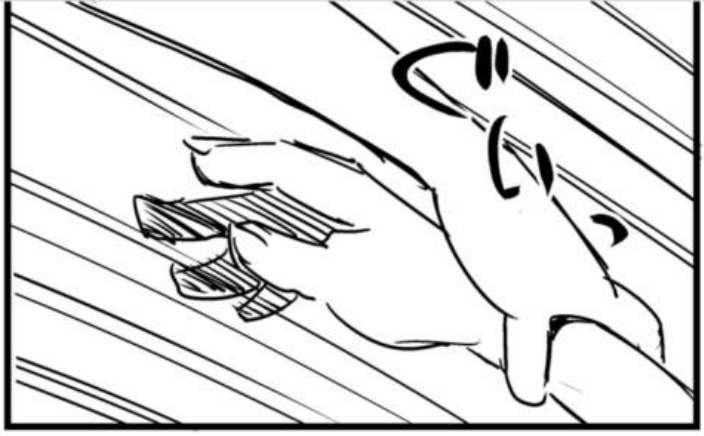


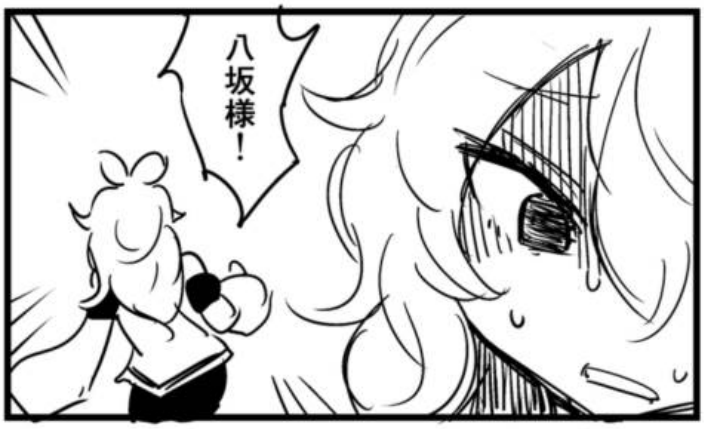
ヒッ

あー見ちゃいましたか

お前一体何を!!
何って野菜ですよ
ほら
地面から生えてるじゃないですか
使い古しの傘を埋めるんですよ
そのまま付喪神になるのを待つだけだからノーコスト
ずっと小屋の中だから知能が無くて安心理想的な作物です
そんな事…
許されるわけ…
ボッ

火!?
メラ
メラ


ぐいっ

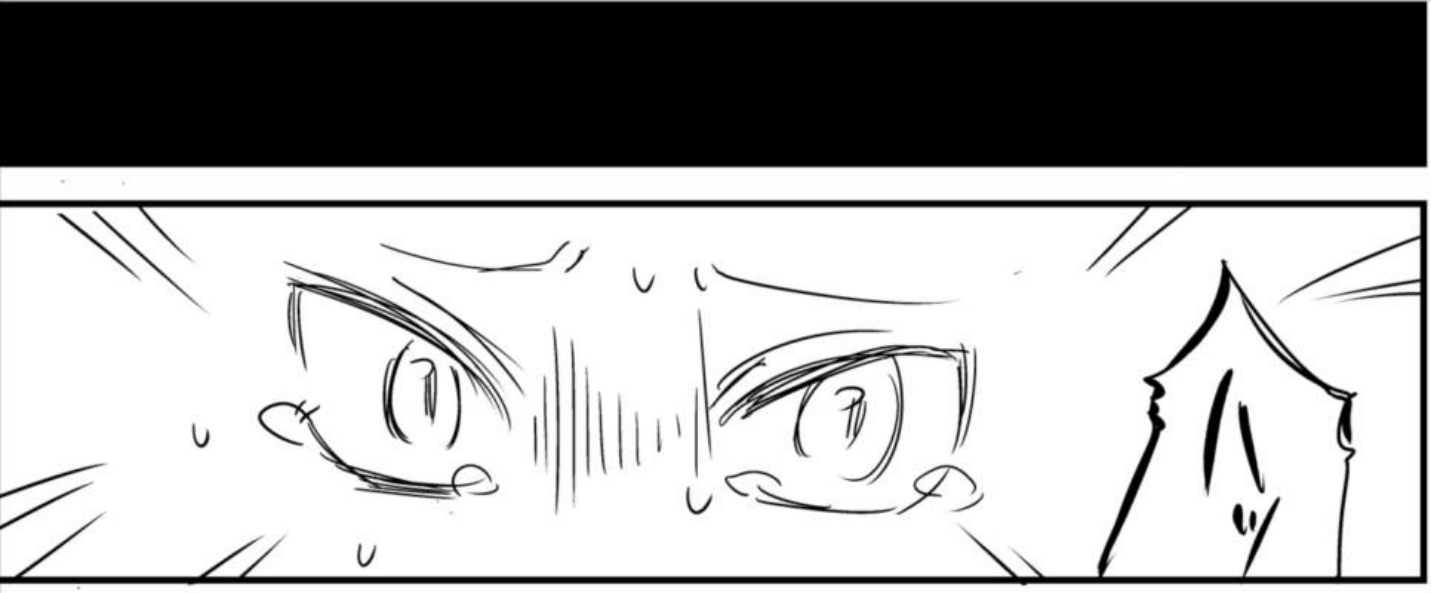

八坂様！

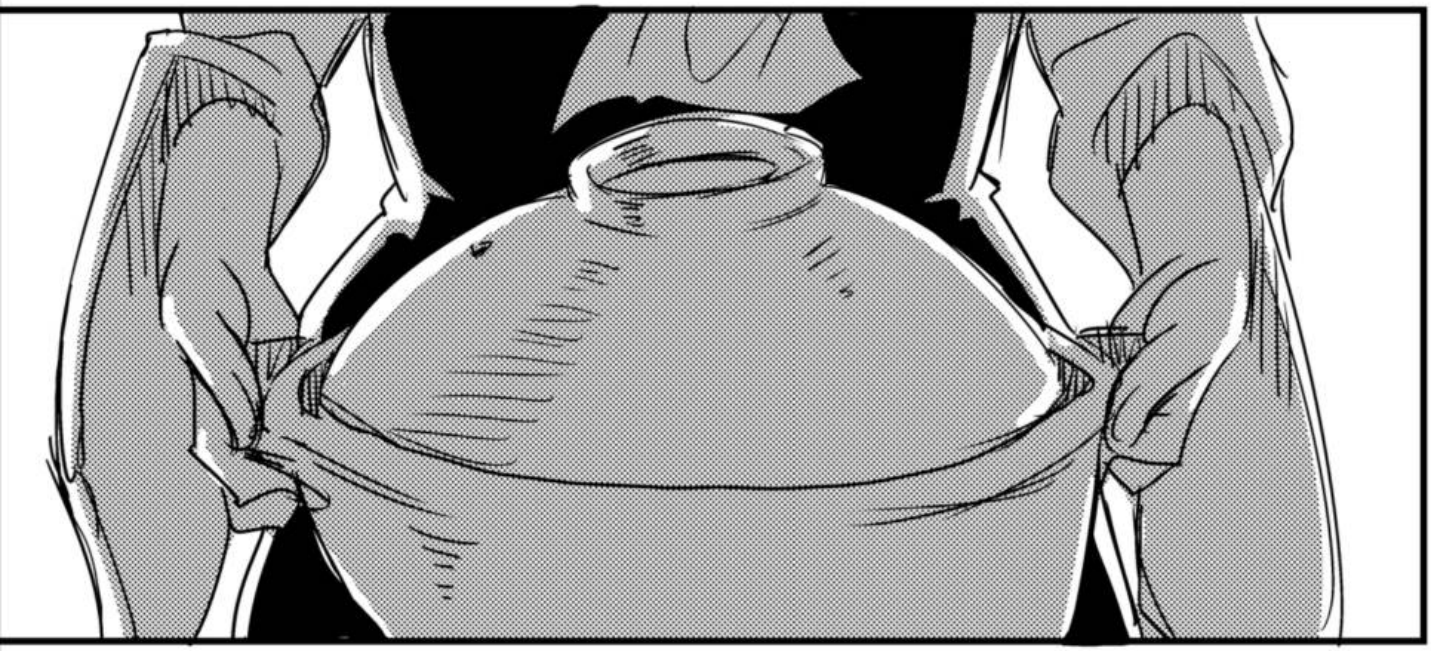
ゴオオオ
バキ

バキ
ゴオオオオオ

ごめんなさい

ごめんなさい
ごめんなさい
ごめんなさい





おしまい

「葡萄酒色の闇」

作・あんどおひふみ

放課のチャイムが鳴った。同時に各教室から一斉に生徒たちが溢れ出し、平生人気の少ない廊下に一時の活況がもたらされる。彼ら彼女らの表情は皆一様に開放感に輝き、今まで眠い目をこすりながら聞き流していた授業の内容などさっぱり忘れて、めいめいの目的地へと向かって足早に去っていく。

私こと宇佐見蓮子もその一人。編み上げ靴も軽やかに、リノリウムの床をきゅうと鳴らして、マエリベリー・ハーンの待つ学生喫茶へと駆け出した。

「もう十分も遅れているわ……下らない話が長すぎるのよね、あの先生」

私はぶつぶつ不平を漏らしつつ、お気に入りの帽子が風で飛ばないようおさえながら、キャンパスの片隅にひっそりと建つ喫茶店へと急ぐ。

「メリー、ご立腹かしら……」

メリーは時間に五月蠅い。それでいて遅刻魔の私とつるんでいるのだから不思議なものだ。私がどんなに遅れても、彼女はいつもたおやかに微笑んで私を待っている。その表情だけを見れば、誰も彼女が腹を立てているとは思わないだろう。傍若無人な友人にも寛容な、器の大きい人間なんだと思うだろう。

しかし、一度機嫌を損ねたメリーのタチの悪さは、そんじょそこらの赤ん坊など及びもつかない。駄々をこね、我が儘を通し、無理を承知でとんでもないことを私にふっかけてくる。

とはいえ、私がメリーの機嫌を損ねるような言動をしなければ良いだけの話なのだが。そもそも、私以外に彼女が怒っている姿を見たこともない。

「実は本当に寛容なのかしらん」

取り留めもなく考え散らしているうちに、目的地へと到着していた。

喫茶店といっても所詮は大学の施設である。街の店のようにその道ウン十年のマスターがやっているわけでもなければ、味が自慢の特製ケーキを賞味できるわけでもない。それでも学生が仕切なしにやってくるのは、適度に広い机と静かな環境、そして珈琲一杯百五十円という値段の安さにあるのだろう。

なんの色気もない硝子の引き戸をくぐり、店内を見渡すと、やや橙色の照明の点いた部屋の一番奥に、ふわふわと揺れる金髪の少女を発見した。私はカウンターで珈琲を一杯注文してカップを受け取ると、平静を装って彼女の向かいの椅子を引いた。

「あら、すいませんけれど、そちらの席は待ち合わせになっておりますの。私の友人なのだけれど、なかなか来なくって困っているのよ……道にでも迷っているのかしら」

メリーは私ににっこり笑いかけて言った。

「へえ、その友人ってのは、こんな顔だったかしら」

私は脱いだ帽子の陰から顔を覗かせる。

メリーは笑顔のまま答えた。

「怒っているわよ」

「ちょーっと遅れちゃったかしら、御免御免」

「ちょっと？　ちょっとって言ったの蓮子、今。私があなたと約束したのは十七時。今は十七時二十分よ。二十分なんて言ったら、二杯目の中ジョッキを飲み終えて、次の一杯と追加の肴を注文しはじめるくらいの時間よね？　時間と麦酒は有限だってこと、ちゃんと意識してもらわなければ困るわ、蓮子」

「悪かったってば……」

「大体、あなた、時計要らずの癖に何故いつも時間に遅れるのよ……不思議だわ」

相当頭に来ているのだろう。メリーがよく分からない喩えまで持ち出してきた時は彼女も混乱しているのだ。嵐が去るまで頭を低くしている以外に方法がない。下手に反論すれば、温帯低気圧になりかけていた台風が、それを燃料にまた勢力を回復してしまう。

「――牛歩戦術を得手とする軍師として一生を終えるが良いわ！」

暫くやいのやいのと私を詰っていたメリーは、ようやく言うことがなくなったと見え、やはり意味の判然としない罵倒らしきものを最後に口を閉ざし、一杯百五十円の冷めた珈琲を無理矢理喉に流し込んだ。

「……こんな不味い珈琲を飲んでいるのも蓮子のせいよ」

じとりとした眼差しを向け、メリーは呟く。この視線は和平交渉のサインだ。是非もない。

私は暗に差し出された右の掌に、自身の右手を差し出した。

「そうね……御免なさい、メリー。お詫びに一杯奢るわ」

「結構よ。冷めてなくったって、どうせ不味いわ」

店員がちらりとこちらを見る。

残念ながら、この店の珈琲が不味いのは事実なのであった。

＊　＊　＊

私もすぐさま珈琲を飲み干し、メリーと一緒に店を出る。既に日は大きく傾き、濃い夜闇の紫が、茜色の空を侵し始めていた。

「もうこんな時間だわ。急がなくっちゃ……」

時計に目をやったメリーは兎のように慌てて歩き出した。ただ一言「お腹を空かせておきなさい」と言われていただけだった私は、行く先も知らされていない。そんなことを言うからにはきっと夕食を一緒にとるつもりなのだろうが、果たしてどこへ行くつもりなのだろう。

「予約でもしているの、メリー」

いつもは適当にぶらついて、目に入った店へ飛び込むのが常の私たちだ。わざわざ予約をするなんて、相応に格の高い店に違いない。私は懐のうそさむいことを思い出し、少々冷や汗をかく思いだった。

「いいえ。蓮子が一緒じゃ予約なんて出来ないわよ」

まだ根に持っているらしい。

「でも、随分時間を気にしているようだけれど」

「いつまで開いているか、知らないのよ。少し歩くし、折角着いたのに開いていなかったら嫌だもの」

「なるほど」

ひとまず財布の心配はしなくても良いようだ。ほっと胸をなで下ろす。そういうかしこまった場は、不得手でもあることだし。

「でも、メリーにしては珍しいわね。一度行った店にもう一度、しかも私を誘って行こうだなんて。あなたが二度同じ店に足を運ぶなんて、これは結構期待していても構わないということなのかしら」

「それはどうかしら。あなたも好みだとは思うけれど。まあ、着いてみてのお楽しみね」

そう言うメリーの声は楽しそうに弾んでいた。ようやく機嫌は直ったらしい。私はそっと彼女の隣に並び、街頭を歩いて行く。

丁度今日は週末だ。学生も、社会人も、老若男女が浮かれ気分でアスファルトの上を歩き回っている。歩道に面したショウウィンドウには、新作コスメティックやら洋服やらがきらびやかに並び、私たちの購買意欲を煽っている。

その窓々のうちのひとつ、ふとメリーが足を止め、中を覗き込んでいた。目線の先にあるのは葡萄の房を模した小瓶につめられた、ボルドーのマニキュアだった。

「好きなの？」

「うん？　ああ、まあ、嫌いではないわ。丁度切らしているなと思ってね」

「買ってあげようか、今日のお詫びに」

「結構よ。それなりに値が張るし。今度自分で買うわ」

にべもない。

私たちは再び歩き出した。

「似合いそうだわ」

「なによ、物で釣れなきゃ、今度はおべっか？」

メリーはこれ見よがしにため息をついた。

「違うわ、本心よ。肌が白いから、濃い色が映えそうだなって思っただけ」

「太鼓持ちは不要よ」

そう言ってメリーは渋面を作ってみせる。

「本当だってば」

「どうかしら」

冗談めかして言ったメリーは、さしかかった角を左に曲がった。

私はおや、と思った。

「そっちに店なんて無いんじゃないの」

その路地の先には、うらぶれた神社があるばかりである。ぼろぼろのお社を取り巻く竹林ばかりが立派で、繁華街の賑やかさとは無縁の場所だ。食事処などありそうもない。

「そう思うでしょう。でも、神社の中に店があるんじゃないの。そこはただ通り抜けるだけ。ぐるっと回り込むより近道なのよ」

そう言ってメリーはずんずん先に進んでいく。私も半信半疑ながら、彼女の背を追った。

丹の剥げた鳥居をくぐり、段の崩れかけた石段を登る。両脇に竹林が現れると、そう離れてはいないはずの街の喧噪が一気に遠のいた。灯りに乏しい階段は足下もおぼつかなく、月光に幽かに照るメリーの金の髪ばかりが夜闇に明るい。

ふと目をやれば、竹林の奥には何かが潜んでいるような気にさえなる。秘封倶楽部の活動でこなした数々の冒険のおかげか、足がすくんで進めないなどということこそなかったが、もしもメリーと一緒でなければ決してこんなところに自ら来ようとは思わなかっただろう。

階段を上りきり、境内をそのまま突っ切って反対側へ。するとそこには山の逆側へと下る階段があった。

「ほら、この先なのよ。鳥居のところ。見える?」

階段を下りながらメリーはふもとの方を指さした。確かに、何か灯りがついている。

「なに……?」

間もなく、階段を下りきった私たちの前にその店は姿を現した。辺りには甘辛い香りが漂っている。

「なるほど、そういうこと」

鳥居の前には屋台が出ていたのである。

夜鳴き蕎麦のような、手押しの簡易店舗だった。カウンターには数人分の椅子が並び、提灯が赤々と灯っている。このうら寂しい竹林において、これほど頼もしく感じるものも他に無かった。

「ね、予約なんて要らないでしょう」

「うん。それにいつまで開いているかも分からないわね」

「お客さん? まさか冷やかしじゃあないわね? さあ、お腹も空いていることでしょうし、座った座った!」

私たちが立ち話をしていると、屋台の中から声がかかった。のれんをくぐってみると、驚いたことにその屋台の店主は女性だった。照明の都合だろうか、頭に巻いた三角巾の隙間からのぞく髪は、妙にピンクがかって見える。イヤーカフスでもつけているのか、側頭部には鳥の羽根のようなアクセサリーが見えた。

「お久しぶりね、おかみさん」

「ん……? 前にも来たことあったっけ」

「暫く前に、一度ね」

「暫くじゃあ忘れちゃうわよ」

親しげに話しかけるメリーだが、店主は覚えていないようだ。客商売としては問題があるような気もするが、メリーはあまり気にしていない。

カウンターの向こう側ではなにやら湯気があがり、いかにも空腹を誘うような香りが漂ってくる。しかし卓上にメニューらしきものはない。

仕方なしに私はメリーに尋ねた。

「メリー、おすすめはなに?」

すると店主が口を挟んで言った。

「うちはなんでも美味しいよ、お嬢さん。それでも特にって言うなら、ヤツメウナギは一度食べると良いわ。そんなに他の店で見たこともないでしょう?」

「そうなの、メリー?」

「私はあれ苦手だわ……でも、蓮子の口には合うかもしれないわね。あなた酒盗とかこのわたとか、所謂珍味、好きでしょう」

「ふうん……じゃあ、まずはそれ、もらおうかしら」

「はいはい。ヤツメ、蒲焼きね」
ヤツメウナギが食べられるとは知っていたが、まさかこんなところでお目にかかれるとは思っていなかった。好奇心も手伝って、私はすぐさまそれと、麦酒を注文した。
「私は串、いくつか盛り合わせで。それと麦酒」
メリーも勝手知ったる様子で注文を済ませる。
「串はモツも食べるかしら」
「なんでも食べるわ」
ややあって、狭いカウンターの上は酒と料理の皿で一杯になった。
ヤツメウナギの蒲焼きは、ただのウナギのそれとは違い、ぶつ切りにされたものが焼き鳥のように串に刺さって出てきた。身は固く、歯ごたえがあり、脂が多く独特の生臭さがある。ウナギの名からは想像もできない風味だった。
「ウナギと言われると騙された気分になるけれど、こういうものと思えば不味くはないわね」
「そもそもヤツメウナギとウナギって似て非なる物なのよ、蓮子」
「紛らわしいなあ」
メリーの手元に盛られた串には、モツの醤油煮が刺さっている。その他にも串焼きらしい肉が二、三本。こういった店であれば定番そうだが、不思議と鳥肉らしきものはひとつもなかった。
「鳥は出さないんですか？」
私は店主に訊いた。
「ないよ、鳥は。でも、ヤツメも十分美味しいでしょう？」
「ええ……まあ」
私は言葉を濁す。
「メリー、それどう？」
「この串？　絶品よ」
少々頬に赤みが差しているメリーが請け負った。
私はひとまず懐事情はさっぱり記憶から抹消し、店主に同じ物をくれるように頼んだのだった。

＊　＊　＊

結果的に、私はメリーと同様、その屋台の大ファンになってしまった。以後、私たちの飲み会の主な舞台はその屋台になった。一軒目は別の店に入ったとしても、二軒目には必ず階段を上り、神社を通り過ぎて、鳥居のそばの屋台まで歩いた。三日と空けずに現れる私たちを、さすがの忘れっぽい女店主も観念し、店の常連として記憶するようになっていた。
「神社や里の連中でも、こう足繁くは通ってこないわよ」
というのが店主の口癖だった。
私とメリーは店の上得意となれたことがなんとはなしに誇らしく、時には店主への手土産にそこいらで手に入れたたこ焼きだの人形焼きだのを差し入れることもあった。
私たちがその屋台に行きつけて三ヶ月が経った冬の半ば。メリーが持

ち前の放浪癖を発揮して、私の前から姿を消したのは丁度その頃だった。

＊　＊　＊

それは学内の図書室にて、年度末の単位取得に向けてレポートに打ち込んでいた最中のこと。ふと、私は暫くメリーの顔を見ていないということに気がついた。

記憶を頼りに日付を数えてみると、もう一週間にもなる。

「わ。こんなにほったらかしてたのね。メリー、カンカンかしら……囲炉裏端の南部鉄器みたいに……っていけない、メリーの奇比喩癖が感染っているわ」

私はひとりごち、レポート用紙を鞄にしまった。時刻は十五時。この時間ならばメリーは大体学生喫茶に席を占めているはずだ。

「気付いてしまうと無性に会いたくなるのが人情ってもんよね……」

真冬の外気は身を切るように冷たい。私は童話の旅人よろしく外套の前を擦り合わせるようにしながら、足早に喫茶店へと向かった。

やがて学生喫茶の素っ気ない外見が見えてきた頃、私は都合の悪い事実を思い出していた。

そもそも、メリーに「年度末の課題が忙しいから暫く音信不通になるかも」と宣ったのは、なにを隠そう私自身だったのである。

「『あら、もう寂しくて音を上げたの蓮子』とか……絶対にからかわれるわ……」

しかもタチの悪いことに図星である。

ぐうの音も出ない。

とはいえ、ここまで来ておいて引き返すのも寝覚めが悪い。私は意を決して喫茶店の中へと足を踏み入れた。そう広くはない店内を見渡す。

「あれ、いないわ……うーん、珍しい」

十中八九ここだと思ったのだが。

「いないと思うと探し出したくなるわね」

私は注文を取ろうと澄まし顔で待っている店員を後目に店を出た。それからはメリーのよく出入りしているゼミや教授の部屋を中心に方々尋ね回った。もしかするとニアミスかしらんとも思い、一度図書室へ戻って閲覧ブースをひとつひとつ覗いてもみた。しかし、マエリベリー・ハーンの金の頭髪は、どこにも見出すことが出来ないのだった。

「ふうん……」

私は腕を組んで独り、図書室前のベンチに腰掛けて唸る。

「ま、いないものはいないのよね。どうせいつもの放浪癖が出ているのでしょうよ。他に心当たりも――」

そこまで言ったとき、私の頭にもう一カ所、尋ねるべき場所が思い浮かんだ。

竹林、鳥居のたもとの赤提灯。

もしかするとメリーが立ち寄っているかもしれない。

「念のため行ってみようかしら」

それでも駄目なら、観念していつもの通り座して待とう。そう考え、

私は一路、通い慣れた神社への道を指した。

＊　＊　＊

「ううん、知らないわねえ……最近あなたも金髪の子も、全然来てくれないからどうしたのかと思っていたくらいよ」
アテはあっさりと外れた。
女店主も困惑した様子で首をひねっている。
「いなくなっちゃって、心配？」
「多少は。でも、割とよくあるので。いつもひょっこり帰ってくるんですよ。だから、大丈夫。変なこと訊いちゃって御免なさい」
「何か力になれることがあったら言ってね。大事なお得意さまをなくすのは嫌だもの」
ありがとう、と呟いて、私は屋台の椅子に腰掛けた。もう私にこれ以上できることはなくなった。あとは何も考えずに飲むほかない。
「はい、お待たせ」
足繁く通った結果、席に着くと勝手に店主が料理と酒を出してくれるようになった。所謂『いつもの』という、全飲兵衛憧れの行為である。
しかし、今日は卓に並んだラインナップが普段と違っていた。
ヤツメウナギの蒲焼き、モツ串、麦酒が私の『いつもの』三種の神器なのだが、そこにもう一皿、牛すじ煮込み風の料理が添えてある。
「これ、頼んでないわ……美味しそうだけれど」
すると女店主はウィンクして言った。
「サービス。美味しいもの食べて、元気出して！」
「あ、ありがとう……ございます。味噌煮込み？」
「そんなとこ」
「ふうん……あ、美味しい」
味噌ベースの和風スープは、野菜と肉がごろごろ入っていた。長時間煮込んでいると見え、具材はみんな咀嚼するまでもなく舌先で崩れていく。肉と野菜それぞれの旨みが染み出したスープはこってりとしていて、かつまろやかな風味もあり、これまでに口にしたことのない美味しさがあった。麦酒にもよく合う濃いめの味付けで、私はひょいひょいと食べ進んでしまう。
その時である。
「あ痛っ……んー？」
なにやら固い物を噛んだ感触があった。
「どうかした？　卵の殻でも入っていたかしら……御免ね」
「なんだろ……ぺっ」
少々行儀は悪いが、私は小皿に口の中の違和感を吐き出した。
からら、と乾いた音を立てて皿に転がったのは、卵の殻ではなかった。
「なに、これ……？」
「やめときなよ、なんだか分からないけれど、見ない方が良いわよ」
女店主の制止も省みず私はそれを指でつまみ上げ、アルコールで曇った眼前にかざして見た。

私は、その時、いささか酔っていた脳味噌が、一瞬にして冴え渡ったのを感じた。
そして後悔した。
「う――――ッ！？」
それは半透明だった。
それは象牙色をしていた。
それは一センチメートル角ほどの板だった。

それは、人間の、爪、だった。

「なに、なにこれ……」
私は食道を逆流してくる胃の内容物の酸味を感じながらも、なんとかそれを押しとどめ、臓腑の底から絞り出すように呟いた。
私は。
嗚呼。
私は私の目敏さを一生呪わなければならないだろう。

吐き出した人間の爪。
その端に、残る。
ボルドーを。
見た。

「あああ、だから言ったのに。『見ない方が良いわよ』って、私言ったわよね？　鳥頭の私でも、覚えているわよ、その程度」
頭上から、女店主の声がした。
「ねえ、あなた、鶴の恩返しって知っている？　知っているわよね。いざなぎといざなみの黄泉比良坂での顛末は？　知っているわよねえ」
しかし、見上げてみても彼女の姿はそこに見えない。
「どんなに教訓を積み上げてみても、『見るな』と言われたものを『見て』しまうのが人間の性。哀しいわね……本当、あなたたちは上客だったのに……」
否、女店主どころかカウンターも赤提灯も、自分がかざした掌さえ、分厚い緞帳を降ろされたかのように闇に包まれている。
「さあ、もう閉店。もう店仕舞い。お行儀の悪いお客様に腹を立てた私が告げるわ。隠されたものを覗き見たくて仕方ないと言うのなら、もう何も見なくて済むようにしてあげる」
私は首筋に生暖かい息づかいを感じた。
その時である。
ひゅっ、と風切り音が聞こえたのを最後に、私は意識を手放した。

（了）

著：エンジェルダスト
それに気づいたのはいつだったか――
もう何度目かの輝夜との殺し合い
どれだけ抉りあい、千切りあった身体も蓬莱人の魂魄は元に戻していく
またしましょうね妹紅♪

一方、魂魄から千切れた身体の欠片は
永遠の時間から須臾の時間へと朽ち消えていく
ただ――

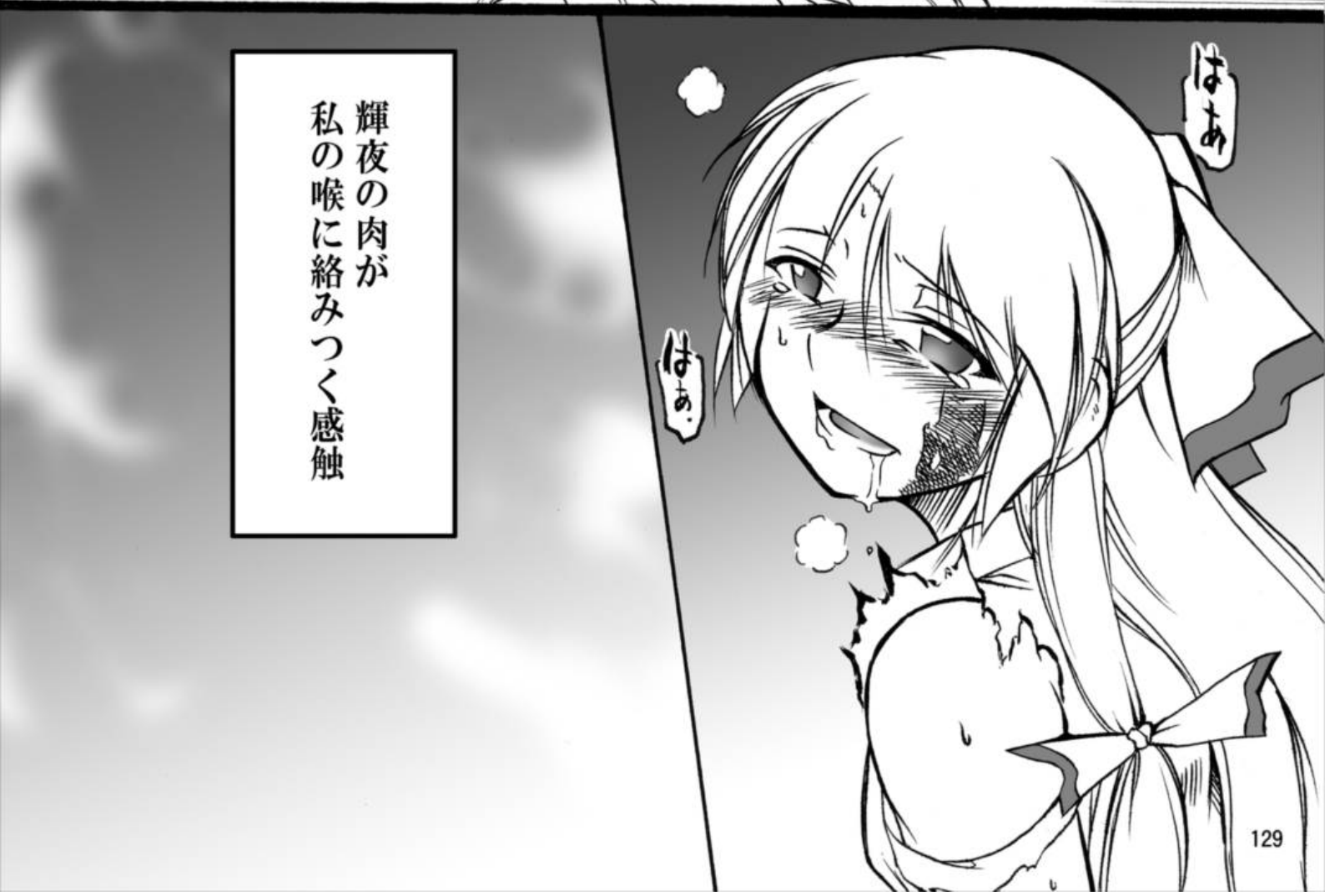
同じ蓬莱人の魂魄が
触れている間だけ、

こうして
輝夜だった欠片は
私の中で
朽ちず留まり続ける

ぶ
ちゅんっ
きゅっ
ごく
ん…
んっく♡
はっあぁ…
ぶるるっ♡

！
がさっ
妹紅…？

びくっ


はあ
はあ
輝夜の肉が
私の喉に絡みつく感触

輝夜の肉の感触が
私の中で
疼き続ける
はぁ
はぁ
帰ったら
新しい服
用意しないとな。
輝夜(あいつ)も慧音(こいつ)も
私の中で
生き続けることが
出来たら――
ごくり

－了－

東方二次創作カニバリズム（食人・食妖）本

R-18Gな幻想郷のごはん合同誌

あとがき コ〜ナ〜

またさぶ
ついったー
@tarotarororo22
ぴくしぶ
id=4139445
きのこ狩りに
行きたいなあ。
by またさぶ

magifuro蒟蒻
PIXIVid=77467
本作はフィクションです。
作中の調理法を
推奨するものでは
ありませんし、
実在の針妙丸には
行わないでください。
ビクッ
http://konnnyakunabe.blog17.fc2.com/

鞘vs峰
●　○
あおじそ
Twitter:moriudon

ぜムリカ
今回はしあわせな家庭の食卓を描きました!!
だれも不幸になってない!すごいしあわせ!
twitter：@kannsou15
pixiv:3079662

今年の誕生日に初めて
鶏の丸焼きを食べたんです
この時点でエロいのに
このエロボディ
切り裂くワケです
興奮しないわけが
ないじゃない！
…ということで
この感動が忘れられず
みすちーに犠牲に
なってもらいました
エロいカーブ
エロポイント
骨折もちょい
エロい足クロス
原崎

おちこち
twitter: @ochikochi_495
pixiv: id=2667323
skype: ochi_kochi
がんばって
描いたヨ!

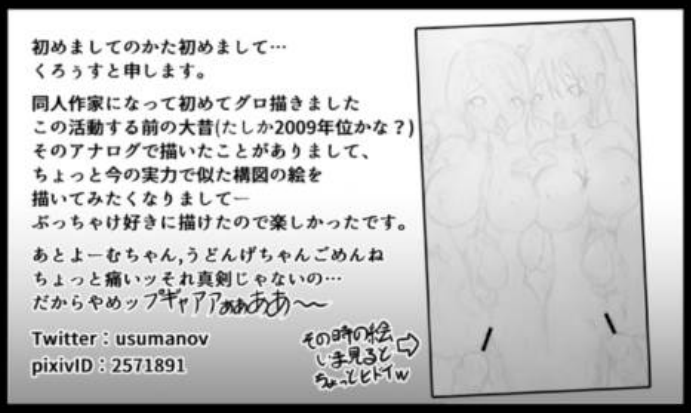
nnnn(仮)
とのこいろ
主文：やきとりたべたい
twitter@Nizuity08
pixiv:ID:1590076

ヤルク
pixiv 105609
(ヤルク/亞琉久)
https://twitter.com/yaruku
ポカッ
マイ祖国タイワンの豚脳湯
はオイシイです
みんな来てくださいね
?

P.N いろどり
Pixiv：2889
手羽先もいいけど
美少女のタン塩って最高よね
iRODORI
ハァ

ごはんまりさ
パカー
カニバルコープスのジャケパロ合同と勘違いして参加してましたスイマセン。
好きな食人鬼はアルバート フィッシュです
よろしくおねがいします。
バッタ
Pixiv：541434
ツイッタ：honey_burst

カラクリ
PIXIV：1245153
小傘 in ゼリー
10秒チャージで小傘ちゃんを補給！
(ง˘ω˘)ว
プルン


初めましてのかた初めまして…
くろぅすと申します。
同人作家になって初めてグロ描きました
この活動する前の大昔(たしか2009年位かな？)
そのアナログで描いたことがありまして、
ちょっと今の実力で似た構図の絵を
描いてみたくなりまして―
ぶっちゃけ好きに描けたので楽しかったです。
あとよーむちゃん,うどんげちゃんごめんね
ちょっと痛いッそれ真剣じゃないの…
だからやめップギャアアぁぁぁぁ～～
Twitter：usumanov
pixivID：2571891
その時の絵
しまるとちょっとヒドイw

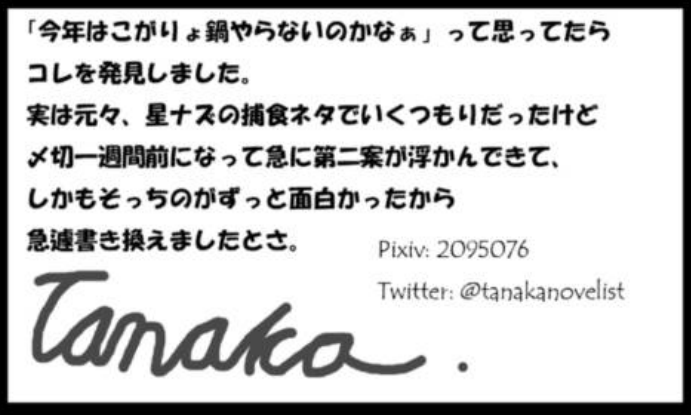
おいしいエビが食べたい。
えび
twitter.@hrwt_nitro

食中毒には気を付けよう！
『ナズと星どっち食べたい？』って
聞かれたら半分ずつ
けど生はお腹的に無理だから
渋々すきやきにして食べたい
ヒヤシン酢
Pixiv：995944
Twitter：fukasu

友達は、二人とも美味しかった
みしま
Category426
Twitter:misima426
Pixiv ID:9167103

おかしいな
イチャラブかいてる
気がしてた
のた
金虢
@Q_kinsyachi
@menhukuro(RIBO)
pixiv 4847314
ありがとうございました

壁抜けの邪仙『霍青娥』 女性
…本当に食べてしまったのか？
友好
フーポ
twitter:@huupoppo pixiv:74538


「今年はこがりょ鍋やらないのかなぁ」って思ってたらコレを発見しました。
実は元々、星ナズの捕食ネタでいくつもりだったけど
〆切一週間前になって急に第二案が浮かんできて、
しかもそっちのがずっと面白かったから
急遽書き換えましたとさ。
Pixiv: 2095076
Twitter: @tanakanovelist
Tanaka.

今回は食人……食妖？
ということで、こいしちゃんをもぐもぐ
しました。というかさせました。
フランの食べてるシーンを描きつつ
漫画の中のフランがちょっと
羨ましかったりなんだったり……
僕は多分フランと違って
骨ごとは無理ですけど。
眼とか齧りたいですね。

詩季

TwitterID shiki_scarlet

ゆきすけ
pixiv 909381

参加させて頂き、ありがとうございました。カニバということで、内臓たくさん描けて楽しかったです。

職業柄毎日毎日肉塊と顔を合わせます、
はじめの頃は動物の命を頂くので丁寧に扱って
いましたが何回も見ていたらそんな感情も
次第に無くしていき、今まで命と思ってた物が
ただの肉塊でしかなくなりました。
感覚が薄れて命を物としてしか見れないのも
少々サイコかもしれませんが一番酷いのは
頼んだのに食べ残す客です(憤慨)

pixivID=1414627
緋泉ヒロ(ブッチャー)

クールー病とかなんとか言うけどさ

許されるならちょっと食べてみたくない！？

あ、豚の脳みそは美味しかったです。

samin心の一句

魔理沙ちゃんの涙をぺろぺろしながら
魔理沙ちゃんの脳味噌を啜りたいだけの人生だった

あどにす

あんどおひふみ

エロ・グロ・百合が主食です。
普段は１次創作をメインにユタ屋
というサークルで活動しています。

Twitter : @suisei12123

Tunblr:

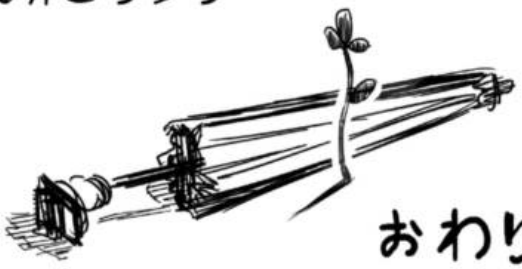
鍋のシメは
うどん派です！！

レキシタイふのじ(MILKPOP)
twitter:hoo_letter

眼球は
鮮度が大事。

エンジェルダスト
（サークル：AbyssDragon）

細井コウゾウ



おわり

参加者の皆様、手にとって下さった皆様に感謝致します。
美味しい幻想郷をありがとうございます、ごちそうさまでした。

企画・主催　magifuro蒟蒻

奥付

原　作：上海アリス幻樂団
発行日：2016年　12月29日（コミックマーケット91 一日目）
発　行：magifuro蒟蒻（蒟蒻鍋）
ブログ：http://konnnyakunabe.blog17.fc2.com/
pixivID：77467

印刷所：SUNGROUP
http://www.sungroup.co.jp/

※東方Projectは『上海アリス幻樂団』様の著作物です。